
シェルボックス・ストーリー

小田中 慎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シエルバックス・ストーリー

【Nコード】

N7622V

【作者名】

小田中 慎

【あらすじ】

太陽系から数百光年の彼方。双太陽を巡る惑星「カスケー」と強大な帝国「カローン」との戦いから五十年の後。ひとりの老人が中立星のソレルに降り立った。港の役人も敬意を払うノイ・レ・パウス（＝語り部）と呼ばれるカスケー人の老人は、港の定宿で酒を飲みながら若者に昔話を語り聞かせる。それは宙の難所、フウルフェ礁の誕生にまつわる話だった。己の名誉を棄て星を護ろうとしたひとりの勇者と、わが身を棄てて勇者を救おうとしたひとりの娘の叙事詩。旧き良きスペースオペラに思いを馳せた英雄譚、のつもり（

あくまでつもりですから）になった作品です。
空想科学祭2011参加作品。

1（前書き）

主な登場人物

カスケー星

老人「ノイ・レ・パウス

「語り部」と通称される老水夫。

ゴルフエ

カスケー航空軍の将校。

フウルフェ

カスケー政府高官、シレット次席護民官の娘。

パ・ラ・シレット

次席護民官。フウルフェの父。

護民官（バ・ラ・クグレック）

カスケー政府首班。

モリヨフカ

カスケー軍の作戦参謀。

イクレンド

ゴルフエの副官。

財務大臣

次席護民官派の重要人物。

警察大臣

護民官派の一人。

ノルケ

現在のカスケー軍将校。

カローン星

ストラー（ガントウル）

カローン軍の名将。

アルフェル（コト・ソーフ）

カローン帝国王室皇太子。軍の司令官。

シュバック（コト・ソーフ）

カローン国王。

ソレル星

坊主

酒場宿の主人。

星系の略図はブログまで

<http://blog.google.ne.jp/glass365/e/97be9da0fc732f0ddb36916c8a1873720>

われわれの棲む太陽系から数百光年の彼方。

われわれの進化とはまた別の進化を遂げ、太陽とはまた違うタイプの母なる恒星に連なった幾多の星があった。

十三の惑星を有するその星系で、地球型とはまた別の生物適用環境を持った四つの星。

青と黄色、連星の太陽に対し「人」の棲むいちばん遠い惑星「ソレル」。その内側にあつて同じ軌道上を百八十度はなれて進む双子の惑星「カローン」と「カスケー」。そして双子惑星のすぐ内側を巡る砂漠の星「レクルス」。

そのなかでもカローンとカスケーには長い^{いさか}諍いの歴史があつた。

二つの星が最後に争つたのは、地球の時間軸に従えば数百年前。そこに棲む彼らにとっては五十年ほど前のことだ。

今に至ればこの星系は平和を享受しており、四つの星は共に栄えている。

ここにひとつの港町がある。その星系の第六惑星、争つた兄弟星、内側の軌道を巡る第四、第五惑星のどちらにも組せず、中立を護つた星「ソレル」最大の宙港だ。

ソレルには海と呼べるものはない。港と言えば即、宙港のことだった。

港はソレルでは貴重な塩湖に作られた。大地を覆う赤い砂のなか、湖の周りにだけ白い砂が広がる。船はこの塩分の濃い水面ではなく白い砂浜の上に着陸し^{もや}舫つていた。

その船は帆を張つてやつて来る。船体のほぼ三十倍にもなる^{ちゅうはん}宙帆。二重太陽から吹き渡る恒星風は止むことがない。

それが止むときは、その星系が滅ぶ前兆となるはず。

この星系の親太陽は若い。

その風は雄々しく力強く、展帆した巨大な宙帆^{ちゅうはん}を推し、ひとたび重力圏を脱すればどこまでも運んでくれた。

宙帆の薄い皮膜はその時折の光を乱反射する。

それは赤い砂漠の色にも、灰色の窒素の海の色にも、蒼い山脈の色にもなった。

しかしそれもソレル人言うところの「宙^{うみ}」を行く船に見られるもので、港に停泊する船は総帆^{そうはん}を畳んで仕舞い込み、面白味のない銀や金の輝きを放っている。

なかでも不気味に目立つ黒く染め上げた船体を持つものは軍艦。その存在だけでソレルの中立を守り抜いた防備艦隊所属だった。

老人は港湾案内人がタグボートに積んで持ってきた補助動力ポッドを断わり、降下を始める。案内人の指示通り船を正確に操りながら下り用の軌道昇降索に沿わせた。しかしそれに接続はせず、やがて宙と空との境目を越え大気密度が高まると降下制動翼を出して垂直に伸びる黒い索から離れてゆく。

老人の船はまるで木の葉が舞い落ちるような螺旋軌道を描きながら下降した。港湾案内人は規則通り速度を読み上げながら制御のタイミングを知らせ、老人は呟くような復唱と共にコントロールロケットを動かしフットバーを小刻みに踏んだ。案内人は老人が耳目をふさいでもこの工程をクリアすることをよく知っていたし、老人は老人で案内人の声を慣れ親しんだ音楽のように聞くことも出来た。しかしふたりのベテランは油断が最大の敵であることをわきまえていて、決して手を抜くようなことをしなかった。

もちろん船は難しい操作をしなくとも、重力圏を脱した位置に静止する衛星に伸ばされた船舶専用の軌道昇降索で簡単に出入港でき

る。しかし大概のベテランがそうであるように、老人も決してそれを使うことがない。物見遊山の素人なら別だが、本物の船乗りが己の船を他人の手に任せて港に出し入れするほど恥かしい話はないのだった。

船はほとんど逆噴射を使わずに埠頭へと降下して行き、巨大な戦闘艦の隣に舫^{もや}った。

老人は重力影響圏、即ちこの惑星の境界である拠点^{とくだい}衛星から乗船していた入国管理官と検疫官に堅苦しい別れの挨拶を言い、港湾案内人に親しみを込めた礼を言う。

彼ら官吏たちも老人に恭しく敬礼した。普通、権威を笠に着る彼らはそんな恭しい態度を取るなど数少ない。彼らがそのような態度を示すのは、老人がそうするに相應^{うみ}しい宙の男だったからだ。

老人は三人と入れ替わりにやって来た港湾管理官に停泊料を払う。軍艦や政府の補給船も舫うこの場所は一等だった。その料金は老人の旧式輸送船にこそ相應^{うみ}しい二等の三倍はした。

それでも老人は常に一等のこの場所へ舫う。

この星の治安はよくない。

軍艦の隣に舫うのは普通、一種の保険だと言われている。その隣で盗難事件が起きれば、それがどこの旗を掲げていようと陰で笑われるに決っている。だから軍艦の隣はこの上もなく安全だった。

老人は常に一人でやってきた。彼の使う補助ロボットたちはごく普通の作業用なので番犬の代わりにはならない。警備ロボットは高額なので使ったことはない。

ソレルのこの辺り一帯は開拓時代が長く、今も荒事が頻発する。何をされても誰も助けてはくれないし、盗賊に積荷を奪われても文句のひとつも言えないのだ。

とはいえ、もしも老人の船を襲うという勘違いを起す気になる狼藉者がいたとすれば、その者は余程の間抜けか遠方からやって来た

のに違いない。老人は気にも留めていないが、いつでも老人の船がソレルの支配圏に入った瞬間から出て行く瞬間まで、この星の保安当局が監視し、密かに見守っていたし、それはこの港では公然の秘密だったからだ。

だが、老人が一等埠頭の、それも必ず軍艦が停泊している隣に泊めるのは保安のためではなかった。

それは老人のノスタルジーが為せる仕業わざだったのだ。

港への係留を済ませ、少ない積荷を僅かの時間で揚陸させる。するとそれを待っていたソレル人の船舶雑貨商が声を掛けて来た。

「パウスさん！」

老人は愛想よく笑いながら近付く男に手を上げて、

「しばらくだな。本当にいつも絶妙なタイミングで現れる」

「いえいえ、それが私の身上ですから」

「イオンドライブ用の保冷材が心もなくなった。安い奴は使い物にならん。高い方をくれ。燃料パックは小さいヤツを四つ。それといつもの消耗品を一航程単位」

「毎度どうも」

「この一号にリストを渡してある。頼むぞ」

雑貨商は傍らのロボットが捧げ持つリストを受け取りながら、

「この先のパイレシユで砂嵐がひどくて。今日到着分の積み荷がまだ届いていませんよ。多分、一日二日は待たないと」

つまりは老人が載せて帰る荷も届いていないということだった。それはよくあることだったので、老人は僅かに顔を顰めただけだった。

「仕方あるまい。一晚ここで足止めだ。そういうことならお前も明日で構わんよ」

雑貨商は恭しく礼を言うのと去って行く。老人は地平を紫色に染めている黄太陽を見やって、

「相棒たちよ、わしは坊主の宿に行ってくるよ。明日、黄太陽が顔を覗かせる頃には戻るとしよう」

傍らに侍る一号にそう呟くと、老人は船をロボットたちに任せ、一人上陸した。

宙の風が止むことがないのと同じく、この港に吹く風も止むこと

がなかった。

赤や白に関係なく砂の粒子は風に乗り、港で働く者たちを打つ。そのため誰もがゴーグルと風除けの布を顔に巻き、話す声はくぐもっていた。

老人もゴーグルと布を顔に巻くと背中に擦り切れた船員袋をさげ、風に反してとぼとぼと歩いて行く。

埠頭の先には街が広がっている。その迷路のように入り組んだ路地は、初めて訪れる者を拒絶する。街角には剣呑な雰囲気を漂わせた与太者が屯していた。この星の治安を預かる保安官たちもごく普通の生活を送る市民が暮らす街に重点を置いて、この場末の盛り場を無視していた。そんな街の中へ老人は頓着せずに入って行く。通い慣れた路地をゆっくりと歩いて行った。

やがて老人は目指す宿に辿り付く。そこは宿と呼ぶより酒場だった。酔い潰れた者が短い時間伏せるだけのスペースを有しただけの場所。それでもここは老人が必ず立ち寄る定宿だった。

老人が自動ではない両開きの扉を引くと、また扉がある。風避けの小空間でゴーグルと巻いた布を外し、船員袋へしまってから内扉を手前に引く。途端、漏れ聞こえていた嬌声や歓声がわっと老人を包む。

ソレルの時間では酔っ払うことはおろか酒を口にするのさえ早い時間（この辺りはどのような銀河でも同じだ）。だが、港湾地区に仕事終わりの定時時間などはないし、辛い労働の後は少々はめを外したくなるのは仕方がないことと言えた。

老人が一步一步、足元を確かめるように進むと、それに気付いた者たちが黙ってしまい、老人が更に進むに連れ、潮が引くように路を空けようと人が割れて行く。店の中ほどに達した時には客の全員が老人を注視することになった。

老人は、そんな定員の倍はいるだろう酔客の眼差しなど意にも介さず、大男や大女たちを縫うようにしてカウンターにたどり付く。

「パウスさん、どうも」

「ああ、元気か。また厄介になるよ、坊主」

老人に声をかけ「坊主」と呼ばれたのは既に中年に差し掛かった男。ソレル人特有のきれいな蒼白の髪を束ねて頭頂に結っている。顔が扁平で鼻が二つ穴でしかないソレル人は彫りの深いカスケー人の老人から見ればお面を被っているように見える。表情もほとんど動くことがないので、その印象はますます強まるが、線のように細い目が微かに釣りあがったのは、彼最大級の喜びの表現だった。

「いつもの部屋が空いていますから。お荷物を運ばせましょう」

酒場の男は老人から船員袋を受け取ると、傍らにいた若者呼びあれやこれやと指示をする。その若者が荷物を担って去ると、それを合図に酒場はまたもとの賑わいを取り戻し、あっという間に喧騒に包まれた。

老人がスツールに落ち着いたと見るや、カウンターの男は背後の棚から小さな樽を取って、ぴかぴかに磨かれた透明な杯になみなみと注いだ。

それはパニ酒と呼ばれるカスケー北部の特産物。甘みが強く独特のコクがあるので「子供の酒」と揶揄されて船乗りが口にするには滅多にない酒だった。老人が最初にこの店にやって来てこの酒を注文し、常備はなかったので少年時代の男が店主に使いに出了たのは、もう忘れてしまったほど昔の話だった。

二時間ほどの後。

それまで酒を飲みながら「坊主」と思い出話に花を咲かせていた老人は上機嫌でカウンターを滑り降り、たとえ満員でも「坊主」が絶対に座らせない奥のテーブルにのそのそと座った。「坊主」は棚からパニの新しい樽を取り出すと、テーブルの奥に鎮座した老人の杯になみなみと注いで、恭しくテーブルの中央に置く。すると、一人二人と船員たちが移動し、老人の周りには人垣が出来始めた。

そんな周囲の状況に全く無頓着に見え、パニを呷ってはおいしそ

うにのどを鳴らす老人を見つめる一人の若者がいた。

若者はふんつ、と鼻を鳴らすと片割れの先輩船員に尋ねる。

「誰だい？あのえらそうな爺さん」

「なんだお前、知らなかったのか？あの方はノイ・レ・パウスさ」

それはカスケー由来のことばで「語り部」を意味した。

「呪われた宙そらの話をするんだ」

「へえ」

カスケー人は宇宙のことを「そら」と呼ぶ。「うみ」と呼ぶソレルやカローンとは大違いだ。若者は杯に満たされた火酒・レドックをぐいっと空けると、

「呪われていない宙なんてあるのかい？」

先輩船員は肘で若者を突く。

「一端いっぽうの口を聞くんじゃねえ。あの方の話は本物だ。それに」

と、そこで先輩船員は声を潜ませて、

「あの方の話を聞いた者には幸運が宿る、と言われていてだな、宙で何か厄介ごとに巻き込まれるのを防いでくれる。俺も二回聞いてこの通り指の一本落としちゃいねえ」

そこでふとベテランの船員は思いついたかのように手を打つと、

「そうだ。いい機会じゃねえか。おい、小僧」

「なんだよ」

「もうじきあの方は話を始める。いつもパニの樽をひとつ空けて、二つ目の樽を持って奥のテーブルに移ると、問わず語りに始めるんだ。聞いてこい」

若者はとんでもないと首を振り、

「冗談だろ？俺はこの後フェリンとしつぱりするんだ」

「バイタなんぞいつだって抱ける。それより、あの方の話を聞ける機会なんてそう滅多にないぞ。ふらりと来て、ふらりと消えちまうんだ。次はいつ会えるか分かんないぜ」

「自慢話じゃないでしょうね。ごめんだぜ、そういうのは酒がまず

くなるし」

先輩は若者の頭を叩いて、
「減らず口叩くんじゃねえ。いいから行って来い。ほら、じきに始まるぞ」

若者は舌を打って、それでも諦め顔で、

「センパイ。二階に行つてフェリンのヒモに言伝してくれよ。予約通りの時間には行けねえが、あとから必ず行くって」

「ああ、心配するな。俺が代わりに抱いといてやるよ」

若者の軽いパンチをかわすと、

「分かったから、ほら、始まるぞ」

つんと肩を押された若者がやれやれと肩を竦めながらも老人の方に歩いて行く。

すると、カスケー人船員二人の隣で黙って酒を飲んでいた、これもカスケーの若い男が立ち上がり、若者に続いて老人を囲む輪の殿に連なつた。

「親爺さん、ひとつ頼むよ」

「こいつにいつもの話をしてやつてくれよ」

新しい樽から三杯目のパニ酒を注ぎ、ぐいつと呷った老人の周りには十五人ほどの人垣が出来ている。老人に話し掛ける二人の逞しい水夫。その後ろで少し離れ、誰もが同じ諦め顔で佇むのは最後にやつて来たあの若い水夫と同じく若者たちだった。

老人はパニ酒の紅い色を調べるように杯を眺めていた。

「そうかね。そんなに話を聞きたいか」

ぶつぶつと呷くようにして、杯を呷りコトリと置く。

「そうさな。では」

老人は頂垂れる。あまりにも長い間そうしていたので、事情を知らない者たちは眠ってしまったのかと思つた。

しかし老人は眠つたのではなかった。記憶のひだに刻まれた忌まわしい警句に満ちた物語を引き出そうとしていたのだ。

心得たひとりが老人の杯に紅い酒を注ぎ足す。

やがて老人は面をあげゆつくりと語り出した。

その声は呪文を唱えるように静かで、喧騒漂う酒場には似付かない。老人を囲んだ若者たちは思わず身を屈め耳をそばだてた。

「見たところ、カローン本星人やカスケー人もいるようだが、お前たち、アーケガルの戦いのことを知っているかね？なに？歴史で習っただけか。そうさな、お前たちの親父だって戦いに参加する年齢ではなかったからな。停戦になって更に青太陽が二回、黄太陽の裏に隠れたくらい昔の話だ。わしも歳を取ったわけだな。ああ、すまない、話を進めよう」

老人はそこで酒を一口、ごくりと飲む。そしてあとは一気に話し始めた。

「フウルフェ礁を知っているかな？そうだ。カスケーを囲む暗黒礁域、ああ、今ではアーケガル小惑星帯と言ったか、そのなかでもとびきりの難所だ。一端の船乗りなら知らん奴はいない。あそこを避けてカスケーに行くとなれば四日ほど余分に掛かってしまう。カスケー航路最大の難所だ。この話はそのフウルフェ礁にまつわる伝説だ」

——カスケー歴で「青色六十黄色二十八」の年、というからお前たちが親父の精囊の虫ですらなかつたくらい昔の話だ。

カスケー星域にゴルフェという男がいた。

彼は生れ落ちた時から幸運の星に恵まれて、成長して誰もがうらやむ美青年になった。女どもは彼の前に何人もひれ伏したものだ。

しかし、美青年というやつは得てして騒ぎの種になるものだ。ゴルフェを巡っては様々な話があつてな、やれ三つの歳には既に航宙術を理解していた、とか、十の歳に数人の大人の大人を相手に拳一本で全員伸ばしてしまった、とか、さんざん言われている。

さて、同じカスケーにフルフェという女がいた。

彼女はカスケー政府高官の娘で、美しい長い髪を持つ細面の美人だった。

そんな彼女が十九の歳に二つ歳上のゴルフェと出会い、一目ぼれをしてしまったのさ。

ゴルフェもフルフェの美貌と才気に魅せられて、二人は直ぐに結ばれた。

だがな、運命の神はそういう組み合わせを嫌うものと相場が決つていて、この二人の上にも災難が降り掛かるのだな。

ゴルフェは十の歳からカスケーの宙軍くうぐんに入っていて、フルフェとであつた時には小艦隊を任されるほどの期待の星だった。

同じころ、カスケーは兄弟星とは名ばかりのライバル、カローンと最悪のときを迎えておつた。

戦いの始まりと言うものは、後から考えてみればなんと些細なこ

とで、と思うものだ。あの戦いもお互いがゆずり合うことを忘れた縄張りあらそいが原因で始まったものさ。

アーケガルという衛星つぎがあるのを知っているだろう。カロンの周りを廻る第七衛星だ。しかしその周回軌道はいびつで、何年か毎カスケーのすぐ近くを通過する。大体、アーケガルは離れている時間でさえ、カスケーの地上から見上げれば暗黒礁の黒い帯の向こうに目ん玉ほどの大きさで見えているものだ。それが接近の年「アーゲリオン」では子供の頭くらいに見えるんだ。

それだからカスケー人はみな、アーケガルはカロンの星ではなく自分たちの星と考えていた。カロン人はカロン人で、カスケーの近くを通過しても不思議とその引力に引かれることもなく、必ず戻ってくるアーケガルを特別な愛着を持って見ていた。このままではあの衛星つぎはいつか争いの種火となる。そう考えたカスケー人はぐっと堪えてアーケガルをカロンのものと認め、その見返りにカロンは兵を送らず拠点造らないとの慣習しきたりが出来ていたのだよ。

長い間積み重ねたお互いの憎悪は、暗黙の了解で非武装地帯とされていたその星に、カロンが前線基地を設けたことで一気に沸騰したものだ。

長年の慣習を破ったカロン帝国はその年、シュバック・コト・ソーフ王の治世だった。

シュバックという王様は歴代の王のなかでも野心のつよい王様でな。カロンが内軌道の星、レクルス最期の空白地域ライドーに遠征軍を送って地域住民を打ち破り、植民地にしたのもシュバックの時代だ。カロンの版図はレクルスの大部分から外軌道、このソレルの衛星つぎ、ナシユケに至るまで最大になった。

そうして、完全にカスケーの外側を包囲することになったのだな。

話をゴルフエに戻すと、このカスケー最大の危機が起きると彼を

含む全軍が警戒態勢をとり、カローンと一触即発となった。交渉は決裂し、いつなるときカローンの艦隊がやって来るかも知れぬ。

宙軍はゴルフエの小艦隊に出撃を命じた。ゴルフエは愛するフウルフェとの別れを決意し、彼女に告げた。戦いとなれば死を覚悟するしかない。カスケーを護るにはそれこそ死をもつて獅子奮迅の活躍をするしかないからだな。彼女は彼女に相応しい未来のある者と添い遂げた方が良い、そう考えたのだ。

フウルフェは黙ってそれを受け入れた。彼女はもとよりゴルフエと別れるつもりはなかったのだが、ゴルフエが後ろに迷いごとを抱えぬようにした訳だ。出来た娘だな。

「ご武運をお祈りしております。いつてらっしゃいませ」とフウルフェはゴルフエを送り出した。それはゴルフエが聞いたフウルフェの最後の言葉だった。

そういうことがあった後、ゴルフエは命令に従ってアーケガル周辺の偵察に出て行った。表向きは、カローンの真意を、アーケガルにあつめた軍の規模を知ろうとしての行動。一体帝国はほんとうにカスケーを支配下に収めようと侵攻してくるのかどうか。

ゴルフエの部隊は艦隊とは名ばかり、ほんの三隻程度の突撃艦、カローンの一等戦闘艦に出会えば簡単に蹴散らされてしまう。しかも、相手側に開戦の理由を与えるわけにも行かない。戦いは正義のある側が勝つものだからな。

強大なカローンのこと、どこに「王の耳目」が潜んでいるかも知れず、ゴルフエは演習に見せかけてカスケーの周りを巡り、やがて航跡をくらませて暗黒礁域へと入っていった。

お前たちも宙そらの男なら良く知っているだろう？ 当時も今も、暗黒礁域は恐ろしいところだ。

入ったが最後、星の光も黒いガスに包まれてはつきりとせず、至る所に岩礁しょうわくせいや昔の難破船の残骸やらが漂っている。障害物探知装置

や通信装置は一切役に立たない。今の宙帆は自動修復で破れ裂けてもすぐに元に戻るが、当時の技術はまだそこまででなく、あの闇を帆走するのは狂気の沙汰だった。

大体にしてほとんど光の届かないあそこ一帯では光子推進式の宙帆など歩く速度すら出せない。磁場推進式も乱磁流が多発するのでお手上げだ。船は貴重な燃料でイオン噴進機エネミン
ドライブを焚いて手探りで進むしかない。並大抵の神経ではあつという間に磨り減って、しまいは岩礁のひとつに身を碎かれるか、どこにあるかも定かでない暗黒陥穽に落ち込んで藻屑となるのか。とにかくカスケーを護る自然の防塞は航路を知っているカスケーの男でも恐れおののく地獄のような場所だ。

そんな暗黒礁域を突き抜けて、ゴルフエの小艦隊はアーケガルを目指そうとした。

しかしカローン側はカスケーの何手先にも進んでいて、ゴルフエが最初の難所に差し掛かるころにはもう、ひとつの艦隊が暗黒礁域を抜けるまであと二日のところまでに迫っていた。

その航跡はまっすぐカスケーを指していて、ゴルフエがアーケガルを目指す航路とぶつかっていた。ゴルフエは正に虎口に入らんとしていたのだな。

カロンの先鋒艦隊はカスケー攻略の拠点をつくるための資材を積んでいて、制宙権を掌握したらずくにカスケーを巡る衛星軌道にのせていくつも砲台を建設するつもりだった。

高電荷圧縮プラズマビームを照射するレーザー砲は分解して梱包され、つぎの艦隊に付属する輸送船団が持ってくる。カスケーがそれを阻止できなければ、やがて宙からカスケーに向けていくつもの火矢が放たれることになっただろう。地上ではなす術もなく、たくさん街が焼かれ、人々は傷付き逃げ惑う。そして右往左往するうちに泣く子も黙るカロンの降下尖兵が宙から舞い降りてくるのだよ。

ゴルフエの小艦隊はそんなおそろしい任務を帯びてやってきた力
ロンの精鋭と鉢合わせをすることになってしまったのだ。

カローン艦隊の前哨艦と小競り合いを演じたあと、ゴルフエは壁のように並んでいる大小三十にも及ぶ軍艦に完全に包囲されている事に気付いた。相手は星系共通の発光信号で司令官からの忠告として降伏を求めて来よった。その相手司令官というのは、あるうにか泣く子も黙るカローナーの武運誇る将星、ストラー・ガントウルだったのだ。

しかし、それこそカスケー側が望みゴルフエに託した状況だった。ゴルフエは落ち着いて艦隊を止めると、カローン側へ使者が行くことを返信し、たった一人で小艇を操り、ストラーの旗艦に向かった。

そこでゴルフエは一世一代の大芝居を打ったのだな。

ストラーの背後、アーケガルに集結していたカローン帝国軍総司令官直卒の艦隊が、カスケー宙軍総力の奇襲で壊滅したと、ストラーに伝えたのだ。カスケー軍の司令官はストラーの武勇に免じて二つの道を示している、このまま踵を返してカローンに引き上げるか、ここでおとなしく武装解除されるか、と。

暗黒礁域は恐ろしい場所で、どのような通信も遮蔽して通信装置は役立たず、探査装置も狂ってしまっただけで使えない。あそこは完全に外部から遮断されていて、まるで目隠しをされて音が聞こえない部屋に閉じ込められたようなものだ。ストラーから見れば、そんな中で飛び込んで来た敵の使者。それが突拍子もない戯言を言い出した訳だな。

もちろん最初はストラーも信じず、たった一人で乗り込んで大胆にも降伏せよと示唆した若者に激怒した。しかし、ゴルフエの落ち着きは崩れず、丁寧に降伏を勧める。

こういうやり取りが延々と続くと、激しく憤っていたカローンの精鋭どもに、やがて微かな不安が忍び寄った。すぐに殺されるかもしれない運命にある者がここまで落ち着いていられるものか？もし、この若造が言っていることが真実だったとしたら？

暗闇に鎖^{とさ}され、引くにもアーケガルまで手探りで三日、暗黒礁域の詳細な宙図^{くじず}を持たないカローン軍のこと、ここまで来るにも半数を超える犠牲が出ていたのだ。それを非情な將軍ストラーだからこそやり遂げて、あと少しでカスケーの領域に迫った。

しかし、後に続く艦隊が壊滅したとなると、今度は逆に彼らが包囲され壊滅することとなる。この若造はカローンの先鋒部隊である彼らを怒らせ突き進ませる罠ではないのか？この先には手ぐすねを引いて待つカスケーの大軍がいるのではないだろうか？いや、もうすぐ後ろに現われるかも知れない。

そして遂に、ゴルフエの芝居はカローンの精鋭に打ち勝った。

最後まで嘘と見破っていたストラーも、幕僚全員と、たちまち流れた噂で隊員たちの動揺が始まると一旦引き上げることにした。このまま強引に突き進めば動揺と不審にさいなまれた部下を使ってカスケー軍と衝突するしかない。負けるとは思わないが、かなりの損害が出ることでカスケー本土攻略の第一歩は失敗する可能性がある。カスケー攻略はいつでも出来る。体制を引き締めてまたやってくればよい。そう考えたのだな。

ストラーはゴルフエを開放すると、静かに艦隊の向きを変え、暗黒礁域のなかに消えて行った。

賭けに勝ったゴルフエはしかし、喜ぶことが出来なかった。それはそうだろう、カスケーを護るためとは言え、信義を重んじる立派な武人を騙し、己の経歴も汚したのだからな。

きつとストラーはアーケガルで死んでいるはずの皇太子と出会い、騙されたことを知って怒りに震えるだろう。そしてカスケーの汚い

手口を訴えて、ゴルフエの名はカローン人の頭に嘘つきの意味として刻まれることになるだろう。

それでも彼は、軍が彼に託した時間稼ぎが成功したことを伝えに暗黒礁域を出てすぐの前進砦に向かった。そこで待っていたのは驚くべき知らせだった。

つい先程、暗黒礁域の中ほどでカローン帝国軍の主力艦隊が暗黒陥穽に捕まって壊滅したらしい、とのしらせだった。ゴルフエとはまた別の、特別な任務を託された者がその罠を仕掛け、ものの見事に敵を陥れたと。カスケーは緒戦でカローンの攻略軍を打破つたのだ。

ゴルフエがフウルフェの運命を知つたのは彼がカスケーに戻った時だった。なんとカローン本隊を罠にかけた者とは、フウルフェだったのだよ。

彼女はどうかゴルフエの任務を、それが愛しい男の信義を穢すおぞましい任務だと知り、高官の娘と言う地位を利用して軍と政府に訴えた。

どうか自分を罠に使い、ゴルフエが吐く嘘、総司令官の死が現実となるようにしてほしい、と。その訴えは認められ、フウルフェは死出の旅に赴いたのだった。

フウルフェは一人連絡船をうごかして、カローン本隊に向かった。そしてゴルフエがしたようにカローンの旗艦に赴くと、カスケーを裏切って暗黒礁域を案内しようとして掛け合った。

とうぜん、最初は女ひとりの言うことにカローンが動くはずもなく、フウルフェは捕縛され監禁された。しかし、必死に訴える女にこころ動かされたひとりの参謀が、女のことを総司令官に告げたのだ。総司令官は興味を持って、女に会って見ることにした。

それが誰あろう、カローン帝国王家の皇太子であり帝国軍総司令官であるアルフェル・コト・ソーフだったのだな。彼は冷酷で怒りっぽい短気な父王とは反対に、笑みを絶やさぬさわやかな男で、今までも直卒した軍により数々の武勲を打ち立てていて、配下の将兵のみならず帝国民からも慕われていた正真正銘の勇者だった。

アルフェル皇太子はフルフェと対面すると、彼女の言い分をはじめからおしまいで黙って聞いた。

フルフェが持参した、彼女のことはを証明する数々の品にも目を通し、質問もいくつかした。

フルフェはカロンの、いや、星系でもっとも実力と英知を持つ男のまえでも堂々と渡り合った。そして……ついにアルフェル皇太子もフルフェの熱意にほだされ、彼女を信じ、彼女が持参した暗黒礁域の秘密の航路を記載した宙図を受け取り、艦隊の安全な航路を示す案内人として彼女の先導を受けたのだ。

カロンの勇気と英知と謳われた人物が、初対面の敵の女を信じるとは、にわかには信じられないかもしれん。しかし、当時のカロイン帝国にとって暗黒礁域とは正に鬼門だったのだよ。

古くはランポストの戦役、カロンは暗黒礁域内で航宙軍の半数を失う惨事を経験している。やみくもにあの難所を越え、カスケーに攻め入ろうとしたのがいけなかったのだな。

それ以来、カスケーは暗黒礁域を抜ける安全航路の秘密を数百年間も守り続け、カロンは密かに探索隊を繰り出したが、多くの犠牲を掛けたにもかかわらず、完全な航路を見つけることに失敗していた。

以降、カロンは事あるごとにあの場所で犠牲を出し続けていた。艦隊を率いてあの難所を越えたカロン人はおらん。それどころか数百年に及ぶ断交の時代は、お互い本星への往来は途絶していたから、カロン船で堂々と暗黒礁域を抜けた船は一隻もない始末だ。あの時、直前に迫ったストラ提督が最も成功したカロン人だ

ろう。そのストラー提督、航宙術と智謀に長けたストラーさえ半数を失ってようやく出口近くまでやってきた難所だ。暗黒礁域に対する畏怖はあの皇太子にすら染みついていたのだよ。

カローン本隊を安全にカスケーまで送る。それが出来ればカスケーは陥^おちたも同然だった。この強い誘いに皇太子は乗った。そして……フウルフェは百隻に近い大艦隊を一行に仕立てさせ、暗黒礁域を進ませたのだ。その先頭には皇太子座乗の旗艦がいた。今思えば信じられないことだが、あの皇太子はそういう男だったのだな。王者たるもの、なにことも先頭に立たねばならないと信じていた。

そしてそれが命取りだった。

フウルフェが案内を始めて三日目。航程の終わり近く、あと一日もあれば抜けようかというところで、フウルフェは艦隊を罠に誘い込んだのだ。

そこは暗黒礁域で最も恐ろしいもの、暗黒陥穽が多発する宙域だった。

暗黒陥穽はとても恐ろしい。あのガスが漂う宙域のどこに出没するかは誰にもわからない。現れては消えるので予測も付かないありさまだ。

わしも見たことはないが、見た者はほとんどがそれに引きこまれ、消え去るのだから当然だな。ランポストの戦役のおり、カローンがカスケー突入を断念した艦隊の大損害も、暗黒陥穽にはまっただったからだった。

暗黒の渦にひとたび囚われると抜け出すことが出来ない。近付き過ぎた船はゆつくりと円を描くように渦へ引き込まれ、船体は千切れて飛び、粉々にされてしまう。

言い伝えではそれに囚われて死んだ宙^{そら}の男たち・女たちが鬼火と

なつて乱れ飛んでいて、そこを通るものを惑わせ、暗黒陥穽へと誘い込むという。

フルフェは正にその鬼火となつて皇太子の艦隊を誘つたのだ。

気付いた時には手遅れだった。皇太子の船が真つ先に消え、続いて大君に捧げる人身御供のようにして数十隻の船が沈んだ。

慌てて踵を返した艦隊も、別の陥穽に落ちたり、不意に現れた岩礁に穴をあけられたりで、アーケガルへ逃げ戻つたのは、出発した百隻のうち二十隻に満たなかったという。

ゴルフエの詭計により、先に引き返したストラー艦隊も帰りに数隻を失つていて、こちらも二十隻余りの中艦隊になつておつた。残された人々はストラーを頭に、再起を誓つてカローンへ引き上げるしかなかった。

おなじころ。

カスケーを救うために自らを犠牲にしたフルフェは、あの暗黒の宙域に漂つていた。

皇太子の船に乗つていた者たちは全て千切れ飛んで跡形もなくなつていたのだが、不思議なことに彼女だけが意識も残つて宙に浮いていたのだ。

しかし、それもわずかな間で、彼女の身体はゆっくりと透けてゆき、次第に周りの暗闇と区別がつかなくなった。

意識はどんどん薄れてゆくが、代わりに何か別のもので満たされてゆくのが彼女にも分かつた。

すると、どうしたことか、彼女の身体のおちらこちらから青白い炎が燃えあがつたのだ。

炎はやがて彼女の全身を覆い尽くし、彼女の姿はついに見えなくなった。

しかし、その炎は衰えることがなく、いつまでも燃え盛つていた。

そしてカローン艦隊の残骸が微塵に碎かれ燃え尽きたあと一人ぼつんと光り続けているのだ。

その光は今でも目にすることがあつてな。

それがカスケーの軍船ならば、危険な障害物の位置をその光で示し、まるで道案内をするように先立ってこの危険宙域からの脱出を手伝い、

それがカローンの軍船であれば、誘うように瞬いて、船はそこに口を開く暗黒陥穽の方向へ魅せられたように引き込まれるのだという。

人々はいつか暗黒礁域のこの一角をフルフェ礁と呼び、畏れ避けるようになったのだよ。

「そうだ。フウルフェはいまでも幸福に満たされているのさ。好きな男を助けた、その想いに満たされて。その想いがつよく燃え盛る青き炎となつて、な」

老人は空の杯を見つめて呟くように語り終えた。

身動きせずに聞きいつていた若者たちは、しんみりと話の余韻に浸っていた。目尻に涙を溜めるものさえいる。

やがて、機転の利く若者のひとりが老人の空となった杯を新しく満たされた杯と変える。老人はそれに気付く様子も見せずに杯を取り一氣に呷るや、しんみりと言った。

「宙そらの難所として有名なフウルフェ礁はこうして生まれたんだ」

果敢な若者のひとりが咳払いをして、

「あれは五十年前の宙戦かいせんによって沈んだ船の残骸が漂っている宙域に過ぎないぜ」

わざとつまらなそうに言う。老人はそちらも見ずに、

「そうだ。軍やカスケーの公文書ではそうなっているし、実際のフウルフェ礁は船の墓場に過ぎん。ではこれを知っているか？カローンの軍艦は絶対にあそこへ近付かないということを。その先にあるカスケー本星へ行くには近道だというのに、だ」

「確かに、フウルフェ宙域でカローン軍を見たことはないな」

「カローン軍の連中はむつつりした奴が多いし、尋ねたこともないしな」

若者たちは困惑しながらも自分の酒を飲み干す。そんな若者たちを前に老人は、話の最後を繰り返す。

「今もカスケーの軍艦があそこを通れば、青い炎を見ることがある。その炎は、まるで教導船のように彼らの前へ出て、宙に舞う障害物を避け危険な暗黒陥穽に巻き込まれない空路を案内してくれるのだ。」

しかし、そこに現われたのがカローンの軍艦だとしたら……炎は紅蓮に転じて船を惑わせ、船は現在位置や前後左右、上と下さえわからないきりきり舞いをさせられた挙句、暗黒陥穽へと突き落とされてしまう」

老人は若者たちの顔を順番に見渡す。そして静かに言った。

「カスケーは今でもフルフルフェに護られているのさ」

老人は断じると、ぱん、とひとつ手を打った。

「さあさあ、話は終わった。お前たちもそろそろ船に帰る時間じゃないのか？」

そう水を向けられた若者たちは、

「ああ、もうそんな時間だな」

「親爺さん、面白かったよ、ありがとう」

「深酒するなよ、親爺」

口々に礼を言い、三々五々離れて行く。

数分後には老人の周囲に人はいなくなり、若者たちの半分が帰路につき、残り半分が今夜の居場所をここに定め、思い思いの場所で長い夜を過ごす構えを見せていた。

老人は強張った身体をほぐすように伸びをすると、残り少ないパ二酒の樽を引き寄せ、杯に注いだ。続いて目の前に置かれた空の杯にも目一杯注ぎいれる。

「ああ、これはどうも。ありがとうございます」

杯の主は悪びれたり慌てたりする様子も見せず、礼を言うゆつたり杯を取り舐めるように口にする。

その背の高い精悍な若者は、二人の水夫の隣で会話を耳にするや、最後に老人を囲む輪に加わったあの青年だった。

「もう話すことはないぞ？」

居残った若者の態度から只者ではないことを察して、老人は前を向いたまま呟くように言う。

「申し遅れました。私はこういうものです」

若者は一枚のカードをテーブルの上に置く。若者が予想した通り老人はそれをみても驚く様子を見せず、ぶつぶつと呟くように読み取ると、

「カスケー軍の御仁がこの老いばれに何の用だね？」

若者はカードをしまうと、

「今のお話。それだけでおわりではないでしょう？」

「それだけではない？ という意味だね」

若者は一層声を低めて、

「裏がある、ということですよ」

老人はつまらなそうに笑うと、

「あんたの所属は諜報か保安か？ わしを調べる気かね？」

「そういうことではありません。私のことはノルケとお呼び下さい。」

カスケー 航宙軍中級統率官。第七十一遊撃隊の者です」

「ほう。先鋒部隊の精鋭がその風体で中立星のこんな場末に？」

「任務ではありませんよ。単なる休暇で訪れたに過ぎません。クニならいざ知らず、ここで制服など着ていては自分を含めて落ち着かないですからね」

ノルケは老人の杯を満たすと、カウンターに合図してお代わりの小樽を取り寄せる。

「お相手させていただきます」

紅い酒の杯を掲げると、

「カスケーの光輝がいや増しますように」

「星ぼしがいつまでも輝きますように」

それぞれ音頭をいうと杯を呷る。

「それで、先程の話ですが」

ノルケの話を聞きながら老人は黙って杯を弄っている。

「あなたのことは噂で聞いていました。正直な所、ここに立ち寄ったのもあなたに会えたなら、と期待していたからです。軍では何故かあなたのことを正面切って話す上官がいない。嘘つき呼ばわりしている御仁もいらっしゃる」

ノルケは老人の反応を見たが、老人は変わらず杯を手で廻すだけだ。

「ゴルフとフウルフエ。この話はカスケーではタブーです。例えばあなたの作り話、ああ、口が滑りました、申しわけありませんが、おとぎ話だとしても、たいして害のある話には思えない。アーケガル会戦は軍の大勝利で、それが決着した日は公式記念日になっている。あなたの話がその光輝を曇らせるとも考えられない。一体何故なのでしょう？」

ノルケの問いに老人は顔を上げる。

「それに答える、と？」

「嫌ですか？」

「一介の船乗りがそんな大きなことに答えられるわけがない、とは考えないのかな」

「それは答えを知っている者がする受け答えですよ」

ノルケはそこでハタと困った顔付きになると、

「済みません。あなたのことを何とお呼びすれば？」

「名前か？そんなものはいい。みなが呼んでいる。親爺で構わんよ」

「では、あなたの尊称からパウスさんとお呼びしましょう」

ノルケの灰色の目がますます冷たくなった。

「さあ、パウスさん。教えてください。なぜあなたの話はカスケーで黙殺されるのでしょうか？」

老人は目を瞑り肩を落した。あまりに長い間そうしていたので、辛抱強いノルケですら老人が眠ってしまったのか、と思い揺り動かそう、と思ったくらい長い時間の後。

ふと眼を開くと老人が吐き捨てるように言った。

「総てがインチキだった、ということだ」

「何？」

「ゴルフが己の尊厳を捨てて挑んだ策略は紛い物だったのさ。星を護るためには仕方のないものだったかもしれないが」

「紛い物、ですか？」

老人は杯から酒が零れるほどつよく置くと、

「ゴルフもフウルフエも若さゆえに想い描くことが出来なかったのだよ。結果のためには手段を選ばない軍人たち、保身に長けた政治家たちが恥じらいもなく何をなし得るか、ということを、な」

ゴルフエの軍歴は早くから始まった。

カスケー航宙軍に入ったのは十歳。彼の家系には役人が多く、ゴルフエの父も軍とは全く接点のない地方の役人をしていた。

しかし、ゴルフエの才を見抜いた近所に住む航宙軍の将校に推され、選ばれた少年少女が集う士官学校初等科に入学したのだった。それから先、ゴルフエはコネとえこひいきが当たり前の世界で、軍に後盾のない者としては異例の速さで昇進を重ねることとなった。

それは天与の才というものであり、決して小さくはない軍の中でめきめき頭角を顕していった。

そんな軍でも注目の的であったゴルフエが、カスケー政府高官の娘、フウルフェと初めて出会ったのは、彼が中級統率官に昇進してカスケー軍で最も若い艦長となった年のことだった。

その年は黄太陽が青太陽と重なる年で、その現象はカローンでは不吉な年として忌み嫌われたが、逆にカスケーでは幸運の年といわれ、更にこの年はカスケー全星がひとつの国として統一されて百五十年を迎えた記念の年にも当たった。

カスケー軍はこの記念の年に大規模なパレードを予定していて、なかでも航宙軍は過去最大の艦閲式を取り行うことになっていた。ゴルフエは新進気鋭の士官として、本国艦隊の先導を務める大役を仰せつかった。

観閲式当日。ゴルフエは自らが艦長を務める先鋒突撃艦に乗って、宙をにらんでいた。

目の前には母なるカスケーの紅い姿が広がり、宙の深い藍色と絶妙の対比を見せている。

艦隊は三列縦隊に組織され、静かに停止していた。今日は姿勢制御以外の動力を極力使わない指令が出ている。探査装置や通信装置も使用禁止。肉眼と光子・磁気応用力帆走だけで操船し、その技量を星系全体に知らしめるのが目的だった。このために発電機は通常出力の半分以下に抑えられていたが、それは帆走のみでの制限以外にも理由があつた。

「機関長。緊急出力發揮に備えた点検は終えているか？」

「一時間ほど前に。その後二度簡易チェックエンスを実施」

彼より二十ほど年長者の機関長は余計な言葉を一切挟んだことがない。

「済まなかった」

ゴルフエは再度尋ねたことを素直に詫びた。三列縦隊の中央列先頭という名誉な位置を任され、さすがのゴルフエも緊張していたのだ。

その時、艦橋の右舷に立っていた副長が怒鳴るように、

「通信兵！サーライクンを見る、中継信号だ！」

「すみません！」

叱責を受けた若い通信兵がばつが悪そうにする。馴れない発光器を使い、右舷後方に見える二級戦闘艦にもう一度信号通信を繰り返すよう要請した。

「発、艦隊司令、宛、先導艦。貴艦の左舷後方より連絡艇が接近する。貴艦に三名、視察員を移乗するので対処されたし。なお、式典進行に変更なし。命令通り正時に進発せよ」

ゴルフエは内心の苛立ちを抑えて、

「返信。了承。直ちに実施する。以上」

通信兵の復唱を聞きながら副長に、

「左舷側、小艇接舷移乗準備。高官の可能性を考慮して控室を用意。ああ、私の部屋でいい」

「了解」

ゴルフエの不安は的中した。接近して来たのは宙軍の連絡艇ではなく、真っ白に塗装された政府高官用の送迎艇だった。詳細な計画に従って進行しているスケジュールにイレギュラーの訪問者。一生に一度あるかないかのイベントの最中、それも最も緊張が高まる進発寸前に何と言う闖入。ゴルフエの苛立ちと焦りは無理もなかった。

接舷作業を監督していた甲板長が察しよく伝えて来た「移乗員は政府要人の模様。男性二、女性一」に応え駆けつけると、ゴルフエは巷の女どもを虜にした笑みを浮べて視察員に挨拶をしていた。

「カスケー星域次席護民官、パ・ラ・シレットの長女、フウルフェと申します。突然の視察要請、大変申し訳なく思っております」

「ようこそ、お嬢様。我々はいつでも歓迎しますよ。さあ、まもなく式が始まります。どうぞ艦橋へ」

付き人二名を従えて高官の娘は堂々と艦橋に入り、そこにいた宙の男どもの心を一瞬にして掴んでしまった。ゴルフエが焦燥に駆られながらさっさと紹介すると、男たちは例外なく相好を崩した。厳格な副長ですら丁寧に挨拶を返す。お堅い機関長が持場ではなくここにいても同じような表情を浮べただろうか、とゴルフエはふと思っ

った。

「進発五分前！」

一等航宙士官の声にみな仕事に戻り、ゴルフエは艦長席を娘に譲り、自分は副長席に、お付の二人を航宙長と砲術長の席に座らせる。ちゃんとした席があるのはこれだけだったので、他の人間は立っているしかなかった。

「詳しいお話をしている時間がありません。後ほどお話を伺う機会もあります。質問はその時にして頂きますと助かります」

「分かりました。どうぞご公務を優先してください」

ゴルフエは有能だが最も若い士官である二等航宙士を手招きし、

「お嬢様たちのお世話を頼む」

そして小声で付け加えた。

「頼むから俺を煩わすなよ」

航宙士は自信なさげに敬礼すると、艦長席に行つて改めて自己紹介をした。ゴルフエにはもうそちらを振り返る余裕が無く、スケジュールは容赦なく進んで行く。間もなく時間は正時となり、眩い発光弾が三発、後方の旗艦から上がった。

「進発せよ！」

カスケー航空軍の総力を挙げた観閲式は、本国艦隊と辺境艦隊から参集した主力艦を中心に三列縦隊を組んだ総勢百隻あまりの堂々としたもので、周辺に集まった見物用の船団のみならず中継放送を通じて本国でも見る事が出来た。放送通信は遮断されることも了解した上で、意図的に高出力でカローン支配星域にも発信され、カスケーの軍事力をこれ見よがしに見せ付けていた。

艦隊の帆走は最初、物足りないほどのゆっくりとしたものだった。総ての船が照明を落とし、背景の宙の黒より更に黒々とした塊がうごめいているようにしか見えず、見物人は失望の声を漏らす。

すると、艦隊の前方で艦列が動き出すのを待ち受けていた一隻の突撃艦が動き出し、反航の形で接近する。その艦がゴルフエの突撃艦「上方」を航過した瞬間、二隻の船が突然眩い光で満たされた。見物人の中には二隻が衝突し、燃え上がったのかと思ひ悲鳴を上げる者さえ出たが、それは二隻がすれ違った瞬間を合図に発電機を全力発揮、時間をかけて設置されていた電飾を点灯したからであつた。それは船体ばかりでなく展^{ひら}げた帆にも紋様を描き、極彩色が瞬く息を飲むほど美しい光景だった。

航過した突撃艦が中列上方を反対に抜けて行くと、まるでその船が灯りを灯して行くように、通り過ぎた艦艇が順番に点灯する。そのタイミング、美しさ、現われるカスケー宙軍主力の姿、全てが見る者を圧倒して、見物船に乗っていた大勢の人々は息を飲んでしたが、やがて殿を務める輸送船が満艦飾に灯りを灯すと、自然発生的に歓喜と賞賛の聲が上がり始めた。

「進路そのまま。進行」

航空長の声が満足げに艦橋に響く。ゴルフエも緊張の瞬間が解け、満面の笑みを浮べていた。

「お見事です。さすが、我が宙軍ですね」

後ろから声上がり、今まで黙っていたゴルフエも、

「ありがとうございます、お嬢様」

「艦長さん。お嬢様はおやめくださいな。どうかフウルフエと名前です」

「では、フウルフエ様。お楽しみ頂いておりますか」

「それはもう。このイクレンドさんのお気遣いにも大変感謝しております」

高官の子女に名指しで誉められた二等航宙士は思わず恥かしげに顔を伏せた。

ゴルフエは改めてフウルフエを見る。この十年というものの、政権は安定し、護民官と呼ばれるカスケー政府の最高責任者と、次席護民官の二名が権を二分してバランスを保っている。その片方を父に持つのだから、軍などものともせず手足のように見てもおかしくないのだが、フウルフエは気さくに対応して周囲の心を掴んでいた。

「転向点まで十宙裡」

予定表を横目に進行を追っている一等航宙士が声を上げ、ゴルフエは再び式に集中する。

「転^{てんきょ}桁用意。右四点。転向点を中心に下手廻し」

「見張り。前方に注意を集中せよ。定置標識を見落とすな」

「了解」

「総員に告ぐ。五分後に本艦は下手廻しをする。備品の浮遊に注意」

「操舵手に操帆手。腕の見せ所だ。姿勢制御など一切使わずに廻してみせろ！」

「了解！」

その時だった。

「右二点前方より浮遊物急速接近！」

見張りの叫びにゴルフエは瞬時に反応する。

「逆帆を打て！操舵、取り舵一杯！後続艦に警報！総員！衝撃に備

えよ！」

矢継ぎ早の指示でもゴルフエの部下は優秀だった。通信手は後続する戦闘艦に浮遊物体を避けるため急速回頭を行うことを知らせ、操帆手は八本の帆柱を前方に倒して縮帆、光を遮って速力を落す。操舵手は通常の操舵だけでなく先程使うなどと言われた姿勢制御弁を独断で開閉操作して、気体放出により一気に艦を廻す。

船体が傾斜し、磁力だけで止まっていた備品が浮遊する。座っていないかった者はそれぞれ手近の物に捉まり、吹き飛ばされないようにした。

「浮遊物は宇宙^{デブリ}ごみ、来ます！」

「掃宙艇は何をしていたんだ！」

見張の声に副長が吐き捨てる。

それは心ない者が投棄した古い推進器^{ドライブ}の一部で、ゆっくりと回転しながら漂ってくる。副砲のレールガンでデブリを打ち落とすことは出来ない。周囲に多くの船がいるのだ。

逆帆で制動をかけ、舵を切っても艦はじれたいようにしか反応しない。それでも可能な限り素早く操作したお陰で、デブリは左舷をゆっくり過ぎて行くように見えたのだが……

「だめだ、当たる！」

横をすり抜けるように見えたデブリは吸い寄せられるように船体に近づく。そして船体下部、燃料庫を掠めて外殻に衝突した。

カーン、という鋭い音に続きプシューと気体の抜ける音、更にベキベキベキと何かが圧壊する音が響き、船体がずしりと身震いした。船内の明かりが二回三回と瞬いた後、消える。ほの暗い非常照明が直ちに灯る。

デブリは左に舵を切った艦の右舷中央にぶつかったため、慣性の働きで船を強引に逆の右へ廻そうとした。ゴルフエは無闇に大舵を取らず当て舵を命じ、今の衝撃で破損したのは間違いない帆を逆の開きにさせた。

後方から接近していた戦闘艦は下に舵を切り、後続する中央列も

それに従って急角度で離れて行く。両側の列も同じ角度で下舵を切り、ゴルフエの心配を一つ減らせた。

反対に舵を切ったことで制動が掛かり、速度が緩む。二三人がたまらず倒れるが、そちらに気を割く余裕はない。

「掌帆長、帆を畳めるか？」

「だめでしょう、帆柱がさっきの旋回で折れています」

「帆を放て！機関停止」

乱暴な機動で小ぶりな六枚の戦闘用三角帆はぼろぼろに裂けていた。それが船の反応を不安定にしている。思い切りよく帆を捨てる決断をしたゴルフエの命令で帆柱の留め金が外され、恒星帆は帆柱から離れ漂って行く。

「見張を増やせ！周囲警戒。副長？」

「左第二外殻が破れました。第二と第三隔壁が圧壊、その内側にある第一発電室と第二蓄電室の被害が大きい模様。現在ダメージコントロールが応急作業中」

副長の報告に頷くと、

「宙錨投射」

吹流しのような帆が船尾から繰り出され、船から離れた所で円形に開く。帆は太陽風から光子を受けて船を安定させ、同一点に静止させた。

ようやく考える余裕が出来たゴルフエは、通信遮断を破り式典指揮官座乗の戦闘艦に音声連絡をする。現状を簡素に説明すると、お返しに、今の出来事が見物人の指定宙域から離れており、更に映像中継カメラから死角となった場所で起きたことが不幸中の幸いだっただ、と皮肉を言われる。

「最終フェーズまでには応急処理を済ませ戻ってまいります」

「ゴルフエ。無理をするな。お嬢様がいるのだろう？」

指揮官の声にゴルフエは不意を突かれる。今の今まで視察と称して見物にきた高官の娘のことを忘れていたからだ。ゴルフエは振り返ってフウルフェの様子を見る。付き人二人の男はそわそわと辺り

をうかがっていたが、彼女は前を向いてにこやかに座っている。

「ご心配なく。後ほど馳せ参じます」

通信を切ったゴルフエは考え込む。大見得を切ったはいいが、さて、どうしたものか。被害はかなり大きいようだ。帆も失った。応急処置を速やかに終えて、帆走主体という観閲式の進行により普段よりかなり積載の少ない燃料でイオンドライブを焚き、下方に過ぎて行く艦隊に追いつかないといけない。

「副長、航宙長、少しいいか？」

ゴルフエは艦橋の隅に二人を招くと、

「私は損害が確認出来次第、このまま修理を続けながら艦列に復帰しようと思うが、意見は？」

式典指揮官とのやり取りをモニターしていた副長は即座に、

「今のところ、損害の規模はわかりませんが、発電システムに重大な障害が発生しています。帆もありませんので、かなりしんどいですよ？それに動くとなれば外側からの補修や確認は無理です。この状態ではそれは勧められません。まあ、作業用ロボットを数台犠牲にする覚悟なら三割程度の動力発揮で動かせなくもないと思います、それでも船体が持つかどうか。私は反対ですね」

「君は？」

と、航宙長に。

「私も同じです。このまま動かせば外板がどうなるか分かりません。ダメージが拡大する怖れがあります」

「ダメコンに現在までの状況を報告させろ。五分後に進発」

ゴルフエの答えに一瞬息を呑んだ二人だったが、

「了解」

ダメージコントロール

応急修理班からの報告は簡素でいて間違いようのないものだった。「第二隔壁は内部に向かって破れ、内殻に通常の五倍以上の圧を掛けています。内側にあつた第一発電室は大破。第三隔壁は第二隔壁側方に畳まれるようにして折れ曲がり、修理不能。第二蓄電室に有毒ガス発生。浄化中。外殻の装甲板は数枚欠落、二枚がめくれあがつ

ている。現在第二第三隔壁の内側に発泡充填剤を送り込み、内殻に補強材を設置作業中」

「外部作業は中止せよ。外板装甲の監視を強化する。内側の作業は続行」

「了解」

「機関長。動力発揮に問題は？」

機関室にいる機関長はモニターから、

「機関の損傷はなし。発電の範囲内で出力発揮に問題はない。ただ

……」

「ただ？」

珍しく言い淀んだ機関長にゴルフエが聞くと、

「本当に動かすのかい？」

それはまるでままならない息子に尋ねる父親のようだった。ゴルフエは笑いをかみ殺し、

「どうしても追い付きたいので」

「貴官にはこの艦の乗組みと客人の命も託されているのだが」

ベテランの機関長は静かに諭すように告げる。

「もちろん指揮官はあなただ。五十幾人かの安全と、あなたと宙軍の光輝と、十分に重さを量った上での判断と信じる」

ゴルフエは瞑目したがすぐに目を開き、

「個人の意地や名譽のためではない。式の模様は全世界に発信されている。たとえ今はごまかせるとしても、カローンは必ずこの事故を察知して悪意のある湾曲をするはずだ。カスケーの民衆に宙軍が頼りないものとして映るような。その時に反証出来る行動をしなくてはならない。事故があっても一隻たりとも欠けずにゴールへ辿り着く。緊急事態でも最善を尽し任務を全うしようとする姿を残さなくてはならない。今の私に求められているものはそれだ」

艦橋は一瞬静まり返った。そこに静かな声が響く。

「了解した、艦長」

機関長の声に副長も、

「分かりました。やりましょう」
しかし、まだひとつ問題があった。

「救難指定艦ソレーングより入電。これより救助に向かう。先に特別視察員を回収するため、救助艇を先行させた。到着は十分後。移乗用意されたし。以上」

ゴルフエは思わず高官の娘を仰ぎ見る。艦列に復帰するためには数秒たりとも無駄には出来ない。今すぐに動き出さなくては、艦列がゴールするのに間に合わない。一瞬、無視してこのまま走り出そうか、と考えるが、それでは嫌がる民間人を犠牲にして見栄を優先させたと悪意を持った噂が立つだろう。ゴルフエは焦燥に駆られ歩き回ろうとしかけ、何とか自制する。その時、問題の娘が立ち上がり、軽やかに床を蹴ってゴルフエの傍にふわりと降り立つ。

「艦長さん。私はどうしたらよろしいですか？」

一瞬、瞳と瞳が合い、視線が交錯する。

「すぐに迎えが参ります。お嬢様には申しわけありませんでした。お詫び申し上げます」

ゴルフエの詫びにフウルフエは首を横に振って、

「フウルフエと名前で」

「ああ、いや、フウルフエ様」

「艦長さん。あなたの望むことは任務の達成ですよね？このまますぐに艦隊へ合流したいと思ってらっしゃる。違いますか？」

「それは……」

「ならば、あなたはあなたのなすべきことをなさって下さい。私たちのことは無視してくださいさって結構」

「お嬢様！」

付き人の一人が蒼白な顔で声を上げるが、フウルフエはそれを制し、

「意地を張っているではありません。あなたのためでもありません」

その真摯な声にゴルフエは娘の顔を見直す。

「これは置かれた現状を理解した上で私が下す判断です。ぜひとも、あなたに与えられた任務を達成してください」

フウルフェの立ち姿は堂々として、揺ぎ無い力に満ちていた。ゴルフエが迷ったのは一瞬だった。

「やりましょう。フウルフェ様、その席で大人しくしていただいて宜しいですか？」

「了解です、艦長さん。その前にひとつ。私に救難艦とお話させていただけますか？」

「なぜでしょう？」

この緊張の時、フウルフェは悪戯っぽい笑みを浮かべ、ゴルフエを呆氣にとらせる。

「だって、このまま救助を振り切ったりしたら、艦長さん、あなたは高官の娘を拘束したまま艦を進めたと言われてしまいますよ。あなたの言葉に従うなら、それこそカロンの思いつぽ、ではなくて？ 野蛮な行為で愚かな首魁の娘を危険に曝した、と」

若いイクレンドが驚いたといった様子で首を振り、航宙長や副長までもが大きく頷く。ゴルフエも恐れ入ったと自嘲気味に笑い出し、通信士に救難艦を呼び出すように命じる。

「それならば、フウルフェ様。一緒に参りましょう」

電力が最大発揮時の半分以上のため、イオン推進器ドライブも騙し騙し動かさなくてはならなかった。また、衝突の衝撃で探査装置もやられてしまい、肉眼監視で進まねばならなかった。当然、先程の損害と同じ事態が発生しかねない。しかもゴルフエが進む宙そらは観閲式用に掃宙された航路ではなく、ショートカットの未掃宙域。

「右舷前方異常なし」

「左舷前方異常なし」

「正面異常なし」

三人の見張りは交代しつつ一分おきに報告の声を上げる。

副長は応急修理班に張り付いて陣頭指揮を執り、航宙長は操舵手の横で腕を組んだまま、遠望増幅器が映し出す宙をにらんでいた。

ゴルフエは二等航宙士を呼ぶ。

「イクレンド」

「はい」

「ここへ」

若いイクレンドはフルフェの座る脇に立っていたが、床を蹴って一飛びでゴルフエの下へ。

「航宙長」

「はい」

「私が直接指示を出す。操舵を頼む」

そして自分より二つ年下なだけのイクレンドに向かって、

「ここにいて私の補佐を頼む」

そこで緊張するイクレンドの肩を思い切り叩いて仰け反らせると、

「さあ、胸を張ってこの危機を愉しもうじゃないか！」

かくして、後にカスケーを湧かせた突撃艦「ルミレ」カスケル」

の冒険が始まった。それは小一時間ほどの出来事だったが、フルフェにとり、いや、ゴルフエにとっても忘れえぬ時間となった。

イオンドライブでゆっくりと発進したものの、わずか数分で捲れ上がっていた外殻装甲板が二枚とも剥がれ、船体に不気味な振動が始まる。それは不快な揺れで、船体の留め具という留め具を緩ませ、船体がバラバラになるのではないか、という不安を掻き立てる。

ゴルフエはともすれば機関停止と叫びそうになるのを堪え、航宙長に「舵そのまま、出力そのまま」と言い続けた。艦長が軍と星の名誉と自分たちの安全を秤に掛け、重圧と戦っているのを知っている乗組員はみな自分の任務に集中し、その冷静な様子は見つめるフルフェに驚きと感動を与えていた。しかし、やがて。

「左第三外殻装甲板の一部、剥離、後落します！」

「舵そのまま、出力そのまま」

「第二蓄電室外壁の亀裂、広がりました。ガス中和剤が漏れ、中和がまなりません」

「左舷兵員室封鎖。左第一、及び第四、五、六隔壁を閉鎖、付近の人員は退避。左右バラスト均衡に務めよ！」

「左第三外殻の剥離止まりません！また二枚後落！」

「落ち着け！耐えろ！この位の損害は宙戦くうせんでは小破だぞ！」

船体の振動はひどくなる一方で、緊張した言葉が目まぐるしく飛び交い、フウルフエも不安を顔に表すまいと必死になっていた。その時、艦橋の前方で指揮を執っていた艦長が振り向き、じっとこちらを見つめる。はっとしたフウルフエは何とか笑みらしきものを浮べる。すると。

「フウルフエ様。如何ですか、我が艦隊の精鋭の働き振り。困難にあつても冷静沈着に任務を全うするこの姿。ぜひ、お父上にお伝えくださいませ」

それはフウルフエの心を打った。それは自分への励ましであり、乗組員への激励でもあった。父を引き合いに出すことで、またその父に会える、生還出来ると約束してフウルフエを励まし、フウルフエが見ていることを改めて乗組員に伝え、冷静さを保つことを訴える。その見事な人心掌握はフウルフエを更に感心させた。しかし、一番フウルフエの心を打ったのは、その言葉が実は自身への叱咤だったのではないか、と思えたことだった。

この人も恐怖と闘って立派に打ち勝っている。そう思うと、フウルフエの心に尊敬と、何か得も知れぬ動悸を高める感情が湧いて来たのだった。

見張がようやく「前方に艦隊見えます！」と叫んだ後、事は驚くほどスムーズに運んだ。

心配そうに後を付けていた救難指定艦が併進して減速した先導艦

の前に進む。そこはこのパレードの終着点であり、多くの観覧船が並んでいた。

気を利かせた通信士が国際放送の実況中継を船内の拡声器につなぐと、溢れんばかりの歓声と興奮した実況の声が響き渡る。

「ご覧ください！不慮の事故により絶体絶命の危機に陥っていた戦闘突撃艦ルミレⅡカスケルが自力で戻ってまいりました！大きな損傷が船体に見えます。帆柱が折れ曲がり外殻が剥がれています。この状態でよくもまあ艦隊に追いついたものでしょう！これは宙軍の普段からのたゆまぬ訓練と一系乱れぬ統率の成せる業かと――」

フウルフェを迎えに来た送迎艇が接舷する右舷側の乗艦隔壁で二人は別れを惜しむ。

「お見事でした」

「こちらこそ、怖い思いをさせてしまい、申しわけありません」

「我が宙軍の力、しかとこの目に焼き付けました」

「ありがとうございます」

「それでは、ごきげんよう」

「お元気で」

二人の視線が別離の瞬間、絡み合う。それはほんの僅かな瞬間だったが二人には十分だった。

ゴルフエは、有力者の娘という立場を一切使わず、自らの危険に對しても目を逸らさなかった勇氣と機転の人を記憶に刻み、

フウルフェは、航宙軍でも一二を争う若手期待の星で、噂にたがわず危機に際しても冷静に確実に職務を全うした若者の姿を目に焼き付けていた。

「フウルフェ！」

「お父様」

政府高官の乗る観覧船に送迎艇が接舷したのはそれからわずかな時間。恐怖の体験で病人のようになり足取りも怪しい付き人と対称

的、元気一杯で疲れも見せず乗り移った娘に、高官の父親が近寄り抱擁する。

「お前、大丈夫だったかい？」

「ええ、この通り」

フウルフェは微笑んだが直ぐに小声で父の耳に囁く。

「あの方。とても素敵でしたわ」

「やれやれ、そういうつもりで出したのではなかったが」

「ええ。もちろんお父様の言い付け通り、耳をそばだて目を開いてまいりました。間違いありません。お父様のお聞きになった噂は本当よ」

フウルフェは抱擁を解いて父の目をまっすぐに見つめた。

「あの方は近い将来カスケーを救う方だと思います」

ゴルフエとフウルフェ。二人の再会は早かった。観閲式から一ヶ月、カスケー政府主催の「統一百五十周年記念式典」の後に行なわれた記念パーティーでのことだった。

式典は厳かに、そして煌びやかに執り行われ、カスケーの国威を示す絶好の機会とばかり、来賓の席には中立星ソレルの首相、カローン軍猛攻の末に植民星と化したレクルス各地方の酋長、そしてカローンからも対外政策相が臨席した。カスケー政府は最初、大胆にもカローン国王に招待状を送ったのだが無視され、それではと宰相を招待したがこれも断われ、結局、外相に落ちついたのだった。

最初にフウルフェがゴルフエを見つけた。彼女は父に連れられ式典に参加し、一般席を眺め下ろす貴賓席に座る政府高官の家族と一緒にになって、壇上で挨拶する父や護民官を眺めていたのだが、延々と続く祝辞にうんざりして、さも熱心に聞き入る振りをしながら、煌びやかな衣装が美しい模様のように広がる会場に視線だけを彷徨わせていた。すると、軍の高官が居並ぶ後方、副官や参謀が控えるその列席に彼の姿を認めたのだった。

たちまち忍び寄っていた眠気も吹き飛んだフウルフェは、軍の正装礼服がよく似合う青年を惚れ惚れと眺めて残りの時間を過した。お陰で要領を得ない話と通訳を介する来賓たちの話を半分は聞き流すことが出来たのだった。

式典の後、フウルフェは急いで貴賓席から一般席への通路を走り、文字通りゴルフエと鉢合わせすることになった。

「これは奇遇。フウルフェ様ではありませんか」

ゴルフエは満面の笑みを浮べてフウルフェを見る。帰ってしまう

のではと急いで探しに来た相手が目の前にいる驚きが過ぎ去るまでの数秒、フウルフエはまじまじとゴルフエの顔を見つめていた。その視線に照れ臭くなったのか、ゴルフエは咳払いをすると、

「どうされました？私の顔はそんなに芸術的価値があるのでしょうか？」

慌てたフウルフエは、

「ごめんなさい。私、あなたをお見かけして急いで降りたものだから」

「フウルフエ様がいるのでは、と私も貴賓席を見上げておりましたよ。式典の前に」

「私はあなたの姿を見かけてから式典がお留守になっておりました」思わず言ってしまうから、フウルフエは赤面する。

「主催側の家族としては、随分と礼を逸しておりますね。どうかご内密に」

ゴルフエはおかしそうに笑うと、

「それでは私の胸に留めて置きましょう」

それから二人は式典後に続くレセプションの間、ずっと一緒に過した。

人々は巨大なドーム状のホールから隣接する庭園にぞろぞろと移動し、そこに用意された立食テーブルに群がった。朝早くから延々と式が続いたので、腹を空かせた大勢が人種や主義に関係なく仲良く食事を取っている。

「見て、ゴルフエさん。あそこ」

フウルフエの指差す先には、カローンからやって来た外相の属員たちがカスケー政府の接待役と一緒に食卓から料理を取り分けている姿があった。

「十分な食べ物の前では、人はあのように仲良くしていられるのですね」

フウルフエの言い方に含まれる憂いに気付いたゴルフエも、

「しかし一旦その量が少なくなれば、そこは戦場です」

フウルフエは隣にたたずむ青年を見上げ、

「どうして分け合うことが出来ないのでしょうか。お互いが譲り合い同じく我慢しあえば、そこに恨みや妬みなど入り込むことがないのに」

ゴルフエは優しく笑いかけると、

「フウルフエ様はお優しいんですね」

「どうでしょう。もちろん、私もそんな夢のようなことが実際に起きるとは思いません。星間政治はもう、お互いを尊重し譲り合うなどと言うことが非常に厳しい事態に陥っています。でも、少しずつでもお互いが譲歩しなければ、この星系はいつまでも騒乱と悲劇の連続になってしまいます」

フウルフエは少し小高くなったその場所から、人々がそれぞれに談笑し食べている光景を眺め渡していた。

「争いごとは星と星の間だけではありません。この星の中にもあります」

フウルフエは広大な敷地に点々と広がった人々の姿をあそこ、ここ、と指差して行く。

「護民官のグループはこちら側。私の父はあちら側。この庭園はまるでカスケーの縮図ね。こんな時にさえ一緒に食事を取らない」

ゴルフエは黙って聞いていた。もちろん彼も政治権力については心得ている。軍は護民官側の強力な後ろ盾だった。護民官の家系は数々の名将を生んでいる。護民官自身も二十年前は軍属だった。今、目の前にいる娘の父率いるグループは、その軍にとって最大の反対勢力だった。

「フウルフエ様はそういうことがお嫌いなのですね」

「ごめんなさい、私こそこんなお祝いの席で興ざめなことを長々と」「いいえ、あなた様が我が軍を敵視するのではなく、そのような公平な目で見ていることが分かりうれしいですよ」

ゴルフエはそこできこり微笑んで、

「まあ、お父上が提出し、星域評議会において僅差で可決された軍の予算縮小については、少し言いたいこともあります」

「まあ、ゴルフエさんったら」

ひとしきり笑った後で、真顔に戻ったフウルフェは、

「こうして平和にしていられるのも、いつまでなのでしょう？」

「フウルフェ様もそう思いますか？戦争が近いと」

「目と耳を塞いで楽しい目先のことだけを見ていればいいのでしょうが、それは無理と言うものです。どうも私は男勝りと言われているので」

「この前の視察のように？」

フウルフェは済まなそうに頷いて、

「ええ、あれは私が無理を言って、直前に観覧船を飛び出したんです。それに父が……いえ、これは……」

「お父上が？」

首を傾げたゴルフエに慌てたフウルフェは、

「口が滑りました。聞かなかったことに」

ゴルフエは困惑しているフウルフェを慰めるように笑い、

「聞かなかったことにしましょう」

即断即決はあの突撃艦で別れて以来、フウルフェが想い描いていたゴルフエの姿に一致した。フウルフェは意を決したように、

「いいえ。お教えしましょう。但し内密に」

「請け負いましょう」

フウルフェは一切を彼に話した。父親のグループが軍の改革派と目される反護民官グループと接触していること。そのグループは少数だが、将来カスケール軍を背負って立つ人材がそろっていること。そのグループがゴルフエを賞賛していること。父親もその経歴を見て逸材だと褒め称えたこと。興味が湧いたフウルフェは観閲式でゴルフエが先頭に立つことを知って、ぜひその指揮振りたいと申し出たこと。父親も軍の逸材で将来、改革派の一員に連なるのではと期待する男を観察するいい機会なので、進んで許可を取り付けた

こと。

「なるほど。しかし私ごときが逸材とは。軍には私以上に任務に励み実績を上げている方などいくらでもありますよ。その改革派と呼ばれる方たちは随分と私を買い被っておられるようだ」

フルフェは静かに被りを振る。

「謙遜はなさらなくてもよろしいわ。私はちゃんと見ていましたから」

やれやれだ、とゴルフエは思う。若くして軍に入ってからいちばん気をつけて来たのはこういう政治だった。軍人は星を守るため命をかける。軍政も必要だとは思うが、それは前線勤務には邪魔なだけだ。ゴルフエはただ純粋な軍人として星に尽くしていたかった。

しかし、この娘は……

「私の何が見えましたか？」

ゴルフエは穏やかに聞いたつもりだったが、フルフェはそこに彼の怒りを垣間見ていた。

「ごめんなさい。軍のことなど分かりもしないのに、私は大きな口を叩いてしまいました」

「いいえ、謝らなくてもよろしいですよ。ただ、正直に私の何が見えたのか、とお伺いしています」

フルフェはじつとゴルフエを見つめてから、

「正義感と実直さと、己の弱さを知りながらそれを見事に律する、そう、本物の勇氣。それを見せて頂きました」

「私が？」

「そう見えました、私には」
「参ったな」

ゴルフエの自嘲はフルフェには好ましいものに見えた。思わず見とれてしまった彼女は思う。私は本当にこの人に心を惹かれてしまったらしい。屋敷の小間使いで口が悪いパヌケットなら「イカレてしまった」と言うことだろう。

「まあ、お世辞と取って置きます。それにそのお褒めの言葉は、そのままあなた様にも当てはまるものですよ、フウルフエ様」

「まあ、お追随ですか？」

「いえいえ。本心ですよ」

「お上手ね」

ゴルフエは笑いながらも真剣な眼差しを向ける。

「本当ですよ。私はあの騒動の中、あなたの視線をずっと背中に感じていたものです。宙^{そら}での事故は、戦闘を本職とする我々宙軍軍人でも叫び出したくなる位恐ろしい。ひとつ間違えば簡単に宙のデブリのひとつになってしまうのです。そんな中であなたは冷静であり続けた。立派なものです」

ゴルフエはいつの間にか彼女との距離を縮めていて、それはほとんど寄り添うに近い距離だった。ゴルフエは話に夢中なばかりにそうなってしまう、意識しての行動ではなかったのだろうが、フウルフエはそれに気付きながらもそのままにしていた。

「私は、あなたの心を探りにあの艦を訪れたのに？」

「そういうことは関係がありません。例えあなた様が私の旗色をうかがうため、あの場に居合わせたにせよ、あなたは立派に己を律し、毅然とされていた。それは訓練された我々にも難しい、そう言いたいのです」

そこでゴルフエは次席護民官の娘の手を取らんばかりに接近している自分に気付き、慌てたように二歩下がった。

「申しわけありません。ご不快だったでしょう」

顔を赤らめ詫びるゴルフエにフウルフエは、

「いえいえ、立派な将校さんにお褒め頂けるのはとても光栄だと思います」

その瞬間、ゴルフエも自身の胸に忍び込んでいた感情に気付く。気付いた瞬間、自分を呪いなくなっただが、それはもう消すことのない炎だった。

二人はしばらく見つめあったまま、その場に立ち尽くしていた。

その小高い丘の周りでは、近づくクライシスを無視するかのような宴が続いていた。

こうして二人の交際は始まったが、それはまるでさざなみのような波風を立たせることになった。

軍の申し子が反対勢力の首魁の娘と交際しているという情報は、たちまち軍の深部にまで達し、ある者は憤慨し、ある者はそれを機会と反対派の弱点とするため策を練り始めた。

反対派は反対派で、どちらに組するか分からぬ軍人が自分たちのリーダーの娘と付き合うことに警戒し神経を尖らせる。

次席護民官は当初、娘の行動に眉をひそめたものの、改めて腹心にゴルフを調査させ、その人となりを知ると、その後は一切口を挟むようなことはしなかった。

時代は正に混迷の度を深め次第に厳しさを増して、内外共に策謀入り乱れる混乱の時を迎える。その喧騒の中、二人の交流はお互いの立場を超え、強い絆となつて行く。

それは後に思わぬ展開を迎える鍵となつたのだった。

旧カローン帝国は現在、カローン星域連合と政体を変え、植民星レクルスを従え、今でも強大な軍事力と経済力を誇っている。

とは言え、帝国と名乗っていた頃に比べればその行動は穏やかなもの。広大な星域を束ねた十二代に渡るカローン家の支配は、ノイレ・パウスⅡ語り部の老人が中年の頃に終わりを告げていた。

カローン帝国の滅亡は五十年前のカスケー星との戦いにおいて、カローン王家の跡継ぎが戦死したことに端を発した、と言っても過言ではないだろう。

皇太子が戦死した場所はその帝国支配域の端、強力な磁気あらしが頻発し、船を巻き込む宇宙の渦「暗黒陥穽」が突如発生する、ガスと小惑星の集合体「暗黒礁域」。それはカスケーを護る魔の宙^{そら}だった。

ちなみに、宙のことをカスケーでは「そら」と呼ぶが、カローンやソレルでは「うみ」と呼ぶ。

カスケーには本物の「海」があつたが、カローンやソレルではそれは巨大な「湖」に過ぎないことがそう言われる由来だろう。

これだけ物の見方が異なる民族がお互いを知れば、自ずと争いの種が生まれる。特に、双太陽の下で同じ軌道をきっかり半年遅れで周回するカスケーとカローンは、その位置が示すそのままに昔からお互いを「陰」と「陽」として意識していた。無論自分たちが「陽」であり「光」であり「正義」で、相手側が「陰」「闇」「悪」であった。

お互いの存在を「発見」して以来、それはいさかいの歴史であり、

特に帆走宙船が発明され、命知らずの冒険家たちがそれぞれ「うみ／そら」へ繰り出すと、行く先々で争いごとが頻発した。

それでもまだ、お互いの科学が未熟だったころは、少し争っては休戦、争っては休戦を繰り返し、全面衝突の愚は避けてきた。

それが済まなくなったのは、片方の星カローンに強権政治が始まり、やがて帝国を名乗って外征に乗り出したからだ。

カローンは完全独裁の帝国と化すと、すぐ外の軌道を巡る星、ソレル侵攻を企てる。ソレルはカスケーとカローンとはまったく別の進化を遂げた惑星だったが、人口は少なく、カローンの集中攻撃にひとたまりもないだろうと思われたが、正にカローンの大艦隊がソレルを囲んだ時、猛烈な「恒星嵐」が始まって艦隊はバラバラとなり、流された軍船のほとんどが傷付き難破する事態となった。

その後何度か同じ試みを企てたものの、ことごとく嵐に阻まれたカローンはソレルを呪われた星と勝手に位置付け、その野心を別方面に向けた。

それは鏡に映った自分たちのような「裏側の星」カスケーだった。

議論は白熱して来た。

この五人の男たちは普段、反論や否定に馴れていない。

それぞれの職域において最高位の者たちの話は、結局のところ自分の権益を弁護するか、相手の権益を削って自分の支配に加えるかを検討することに終始する。そして妥協や打算で物事が進む。一度この沼に足を踏み入れると、その泥を拭って清い水で流すのは困難だった。

それは正に「足を洗う」行為。トップの座から滑り落ちることを意味したからだった。

「では、私にその恥辱を我慢しろ、と仰っているのか？」

「そうではない。一時、耐え忍んでほしいとお願いするのだ」

「同じことではないか？民衆の非難がひとたび私に向けば、足元をすくいに跋扈する輩がたちまち湧いて出る」

「それをやり過ぎることが出来ないほど、貴官の地位は軟弱なのかね？」

「そうではない。一家言ある現場の者どもを束ねるということは、常に四方へよい顔をしていなくてはならぬ、ということだからだ。

過去、私の地位に就いた者はみなそれで苦勞して来ているのだ。このバランスが崩れれば統帥が揺らぐ。この非常時において避けねばならぬことは、一致団結を乱す権力の分散だ」

「その通り。私も貴官に賛同する」

「では、どうしたらよいのかね？アヤツらはこのままでは民衆の心を掴んで一気に政変へ持ち込むぞ」

「だから逮捕してしまえ、と先程から言っている。罪状は星域転覆罪でいいではないか？この非常時に敵と通じて星を売り渡そうとしていると言えば」

「私には無理だ、と先程から言っておるではないか。アヤツらに逮捕状を発行するようなことをしたら、司法が国権と結んで強権を発動したと報道と民衆が騒ぎ出す」

「では何が必要なのだ？」

「強固で間違いようのない、誰が見てもアヤツらが敵と通じている、という証拠だ」

「捏造できないのか？」

「私を見ないでくれ。私の機関がそれを行い、万が一発覚したら二度と信用を得ることが出来ない」

「やれやれ。それを行うのが情報通信を司る貴殿の仕事だと思っていたが」

「そこまで言うなら、貴殿がやったらいい。そちらにも公安という立派な部署があるだろうに」

「公安にそれをやれと言うのかね？スパイの摘発に奔走している公

安に」

「まあまあ、ここで争っても何も生まれないぞ。それに、そんな付け焼刃の証拠など簡単に破れてしまふ。それほどヤツの人気は高い。民衆はそれほど馬鹿ではない。甘くはないぞ」

焦燥と憤りに満ちた静寂が訪れる。軍、情報通信、経済、警察、司法を代表する五人はその権の調和と均衡を象徴するように六角形の会議テーブルの五辺に面して座っている。するとドアが開いて男が一人入って来た。

「遅くなった。済まない」

男の侘びにいえいえと立ち上がった経済大臣が、
「お待ちしていました。どうも結論が出せません」

「アヤツらをどう始末するか、どうもあの方の人気の気が邪魔でして」
防衛大臣の粗暴な言葉に男は眉を潜めたが、

「ごり押しでは無理だろう。民衆を欺くにはそんなありふれた手ではだめだ。それは分かっている。そこでだ」

男はテーブルの周りを歩きながら、自分がこれまでに為し得たこと、そしてこれから為そうとすることを掻い摘んで説明する。五人の高官はそれを魅せられたように聞いていたが、男の説明がひと段落すると、

「その、実に素晴らしい作戦ですな。それならあの男の考えた突飛な案が使えるでしょう」

防衛大臣がにんまりと笑う。

「そういうことだ。その線に沿ってそちらに実行してもらおう」

「人選は終わっています。しかしこんな奇計、本当にうまく行くと思いますか？」

「別にこれだけでカローン軍が壊滅するなどという甘い考えは持ち合わせていないよ。失敗したって構いやしない。カローンを退けるのは本来君たちの仕事だからな。私が欲しいのは、奴の配下が敵と通じた紛れもない証拠だ。これはうまくいくと信じているよ」

空いていた上座の椅子を引き、腰を下ろした護民官、カスケー最

高の権力者は酷薄な笑いを浮かべていた。

カスケーに衛星^{つぎ}はない。その代わりに暗黒礁域があった。

暗黒礁域とは古代、カスケー唯一の衛星が何かの原因で砕かれ飛散し、その周回軌道に散りばめられたことを起源とする。長い年月を経てそれはガス状の物質や砕かれた岩、正体不明の浮遊物が集まる謎の多い宙域となった。

カスケーの地上から空を見上げれば、昼間でも濃く太い十数本もの灰色の帯としてそれが認識出来る。カスケー人にとってそれはなじみのものであると同時になくてはならないものだった。

この暗黒礁域は正にカスケーの「防衛壁」だった。その広い宙域はそこを行く者にとつては地獄のような場所で、カスケー人が宇宙開発に関してカローンに大きく遅れを取ったのもこの暗黒礁域の存在が原因だった。

カスケーはこの障害に航路を切り開くため、多くの犠牲と年月を掛けた。何代にも渡る数知れない挫折とほんの僅かな成功を積み重ね、ようやくこの宙域を開拓した。そしてカスケー人言うところの「外宙」、カローンの支配域に出て行き、彼らと衝突することとなった。

時はカスケー歴で「青色六十黄色二十八」の年。

カスケーとの長年に渡る争いに決着を付けるため、カローン帝国が動いた。

カスケー人と紛争の原因になったこともある彼らの衛星「アーケガル」に前進拠点を設け、暗黒礁域に航路を打通すべく調査船団を送り出し始めたのだった。

暗黒礁域の安全航路はカスケー最大の秘密として厳格に護られて来た。先人たちの犠牲で解明された四本の安全航路はカスケー航宙

軍が独占使用していて、商業や旅客のための船は必ず船団方式でカスケー宙軍の護衛艦隊に絶対服従で先導され航行する。中立星ソレルの船ですら暗黒礁域を一日入った所に設けられた四つの前進砦までしか航行を許されず、積荷はここで移し替えられて、カスケーの船団によりカスケー本星に送られた。

このように暗黒礁域は事実上カスケーのものであったので、カローンの侵出はカスケーにとって最大の危機に映った。

カスケーはただちにカローンに対し、暗黒礁域の調査を中止しアーケガルからの撤退を要求したが、カローンは要求を全面的に拒否した。

「暗黒礁域は元来公のものでありひとつの星が独占するものではない。そこを勝手に占有するカスケーこそ兵を引き、星系全体の利益と発展のため安全航路の秘密を明かし、カスケーへの航路を開放すべきである」

カローン帝国宰相は全星系に向かって厳かに述べたものである。カスケー側も負けじと、カローンのアーケガル派兵を星系の平和秩序を乱す悪行であると断じ、期限を定めた撤兵を求める。

その期限を過ぎてもカローンは撤収はおろか艦隊を集結し始めて、いよいよ緊張の度合いは耐え難いまでに高まった。

アーケガル撤兵期限を過ぎて数日後、カスケー政府はもう一度アーケガル撤兵を訴え、これが受け入れられなければ今後発生する事態の責任は全てカローン側にあると宣言し、これは事実上の最後通牒となった。それをカローン側は完全に無視、いつ戦火が燃え上がってもおかしくない一触即発状態となつて数日後。

暗黒礁域の出口付近、アーケガルに近い前進砦からの連絡が途絶えた。その砦では強烈な磁気嵐や宙を飛び交うノイズが原因で無線通信が不可能なため、日に一度連絡船を往復させていた。それはカローンと断交状態となつて以降も続けられていたが、この日、昨日に続いて連絡船は現われなかった。

夕刻。カスケーの護民官は全国民に向け緊急会見を行った。

いよいよ戦争が始まったのだ。

カローンとカスケーが戦争状態となつて四日後のこと。ゴルフエの姿はカスケー航宙軍の本部にあつた。

前任の突撃艦艦長を首尾よく勤め上げ、次の乗艦が決まるまで待機の期間、戦争はちょうどその時に始まつた。ゴルフエは大型戦闘艦の艦長職の内示を受け、官舎で正式な辞令を待つていたが、やつて来た伝令は意外なことを伝えた。今回の紛争で暗黒礁域の防衛を仕切る司令官から出頭を命じられたのだった。

モリヨフカというカスケー人は痩せた小男で、深い森に棲む醜い猛禽のように常に辺りを見回して、時折何がおかしいのか唐突に笑出すという気味の悪い癖があつた。

ゴルフエが司令官の部屋に入つた時も突然笑い出して、表情にこそ出さなかつたがゴルフエを不快にさせていた。

「ゴルフエ統率官、よく来てくれた」

司令は言わずもがなの事をいい、モリヨフカは再び声を上げて笑つた。

「命令だもの、来るよねえ」

モリヨフカはゴルフエより三歳年上なだけだつたが階級は四つ上の高級号令官。その名はカローン軍部でもよく知られており、過去モリヨフカを暗殺するために潜入したカローンの工作員は総司令官や護民官の場合よりはるかに多い、と噂されている。

この不快で底の知れない男は、正にカスケー軍の頭脳だつた。参謀総長を飛び越して総司令官や護民官に直接入れ知恵が出来る噂され、それを裏付けるように、神出鬼没で重要な決断が下される場所にはいつも顔を出していた。

「さっそくだが」

モリヨフカを無視した司令官はゴルフエが座るのも待たずに話出す。

「貴官にぜひやって貰いたいことがある。このカスケーの命運を左右する、大切な任務だ」

一時間後、蒼褪めた顔でゴルフエは部屋を出た。司令官が言い出したことも異常なら、モリヨフカが説明したことも異常だった。

カスケーはこの数年間、カロンの植民地紛争へ密かに介入していた。もちろん軍隊を派遣したり反帝国勢力へ武器を渡したりするような直接的な介入ではなく、資金や教育、作戦などを反帝国勢力へ授けるウラからの援助を続けていたのだ。

モリヨフカはその極秘作戦のほとんどを立案し、カスケーに通じた反カローン陣営に奇計を授け、カロンの植民地軍を翻弄し続けていた。

そんな彼だからこそ、いよいよカローンと正面から渡り合うことになり、うれしさを隠すことが出来ないのだった。

これから多くのものが喪われると言うのに、この男にとってはそれもゲームの一部に過ぎないのだ。

その欺瞞の大家、モリヨフカが弄した策。その実行者になれ、という命令。

「この私に大嘘を吐けと」

ゴルフエは捻じ曲がったことは大嫌いであつたが軍人である以上、謀略は必要悪と受けいれていた。とは言えまさか自分がその駒に選ばれるとは。それでも正規軍人である以上、二つ返事で命令を受けるしかないゴルフエだった。

たとえそれが自分の信用を失墜させ、彼の事は二度と誰も信用しないような命令だとしても。

任務にあたりゴルフエは戦時昇級で上級統率官となり、カスケー軍で一番若い戦隊司令官に補された。

しかし戦隊といっても、小型快速の突撃艦が三隻と補給艦が一隻というかわいらしいもの。そしてその全てが「機帆船」だった。

彼らの星系で宇宙船といえば帆船が主流だった。

もちろん動力がないわけではない。重力圏からの脱出には補助動力ポッドの推力が必要だ。しかし、大型宇宙船の動力エネルギーを生み出す燃料「エネミン」は宇宙に点在する岩礁しやうわくせいの一部にわずかに存在する物質。とても高価で希少だった。この星系には化石燃料が存在しないし、長距離推進動力に使える放射性物質も「エネミン」以上に希少だった。そもそもカスケーとカローンの宇宙進出も希少な動力燃料の獲得が主目的だったのだ。

軍艦にはその「エネミン」を燃料にイオン推進器のみを使う完全動力艦もあったが、その維持には莫大な経費がかかり、数は少ない従ってイオン推進器トライブと帆走を併用する「機帆船」が主力となるのだった。

ゴルフエの小戦隊は非常事態宣言により静まり返った宙港よりひっそりと出港していった。出征を見送る人もいなければ軍楽の演奏もなかった。事情を知る最高司令部の参謀がたったひとり、埠頭に立って敬礼していた。

ゴルフエは戦隊旗艦となった突撃艦で、モニターに映る宙そらを睨んでいた。傍らには三年前の観閲式以来、公務では側を離れたことがない副官のイクレンドが緊張も露わに立っている。

そのイクレンドがゴルフエから肝心の謀略部分を伏せて作戦の概要を知らされたのは、出港後間もなくのことだった。

敵のカスケー攻略先鋒艦隊が、暗黒礁域へ遮二無二押し入ったことをカスケーの偵察艦が察知したこと。ゴルフエの戦隊は敵に察知されずにそれと相對すること。そして、カスケー政府からの「親書」を敵の司令官（名將を謳われるストラー提督と思われる）に渡すこと。

このわずかな勢力で、カローナーの名將指揮下の大艦隊と対峙する。考えるだけでも恐ろしい事態にイクレンドは武者震いを抑えられなかった。

ゴルフエに従って三年余。尊敬する大して年の差のない上司がめきめきと頭角を顕して、カスケー宙軍注目の的となつてゆくのを後ろから見つめて来たが、これほどの危機はあの觀閲式以来だ、と思った。それでも、恐れを知らないのではなく恐れを十分に知りつつ、それを克服する術を知っている彼の上司に懸命に付いて行く、それが自分の務めだとイクレンドは何度も心に命じていた。

そんなイクレンドを横目に、ゴルフエは深く考えに沈む。

出港して三日、カスケーの周回航路を廻り続け、演習を続けた。

やがて、付近に船がないことを確認すると急角度に航路を離れ、最大船速で暗黒礁域に向かう。礁域の入り口にあるルージ前進砦で最後の補給をして、いよいよ危険な宙域に入つて来た。

あのモリヨフ力や軍の奥深くで相手の出方ばかりを想像している連中が信じているように、カローンが短期決戦を目論んで強攻策に出ているなら必ず来る、とする敵の精銳が潜む宙域。

そして、ゴルフエが失望したことに、モリヨフからの予測は当たっていた。

油断なく遠望器で前方を見ていた見張が叫ぶ。

「右前方三十度に敵艦見ゆ！タイプ不明、一隻。距離二千五百」

緊張に声が上ずる見張の声に、さつと遠望器を廻らせた一等航宙士が、

「何も見えんぞ」

それを半分無視して見張は続ける。

「不明艦はカローン航宙軍ハミレシユ級哨戒艦と認めます。隻数一、他に艦影なし」

そして必死に付け加える。

「信じてください」

若い見張の顔を見るなりゴルフエは艦長へ、

「旗艦砲撃準備！通信士、後続に信号。文。右前方三十我彼二千五百に敵艦見ゆ。われこれより砲撃す。戦隊手出しは無用、進路そのまま、安全距離到達点で待機」

艦長も空かさず、

「取り舵三点。突発単独砲戦！主砲のみ、徹甲弾装填。副砲は飛散弾装填、即待機。目標、前方の敵艦、距離二千三百。照準確認次第発射せよ」

「見張り！敵の正確な位置を教えろ！」

砲術長が吼える。

「今、観測値を電算に送信中……どうぞ！」

「入力確認せよ！」

「方位、よし。角度、よし。距離、よし。偏差……よし！」

「照準急げ！」

砲術長は自ら主砲管制をするため、砲術士の肩を叩いて席を交代する。その時、右前方にはつきりと青い炎が見えた。

カローン側の哨戒艦もほぼ同時にゴルフエの戦隊を視認したために、突発遭遇戦の形になった。

最初にカローンの哨戒艦から誘導噴進弾が放たれる。ふらりと船体を離れた噴進弾は艦に影響を与えない距離まで離れると推進剤に点火、蒼白い炎を引きながらゴルフエの艦に襲い掛かった。

しかし艦長は冷静で、的確に指示を出しながら推進出力を様々に変えつつ不規則に転舵を繰り返す。噴進弾が通り過ぎ旋回して再び向かってきたところを副砲が迎撃して撃ち落した。直後、ゴルフエ

の艦は初弾を発射する。

「次弾装填急げ、周囲警戒怠るな！」

艦長が気にした通りこの辺り一帯は暗黒礁域でも岩礁が多い宙域。今も船体の半分ほどの岩礁を右に通り過ぎる。

「初弾、外れました」

既にその姿が良く見えている敵の左側、続けて二回爆発が起きる。逸れた弾が自爆したのだった。

「修正値確認。偏差をもうひとつ引け。よし。撃て！」

主砲が二発目を発射する。砲口から眩い光が発するが音は無い。弾体が砲を離れる際に反動でグラリと艦が揺れる。衝撃を完全に吸収するタイプのこの連装砲もこればかりは仕方がない。カローン側は噴進弾を好み、特に今相手にしている小型艦はほぼ全てが噴進弾を主兵装としているが、カスケー側は今も昔もレールガンが主体だった。

敵も負けてはいない。艦橋から見ている者全てに青い炎が見え、職務に忠実な見張りが「敵、噴進弾発射！」と言わずもがなのことを叫ぶ。

「艦長、上げ舵一杯」

ゴルフエは前を見つめたまま告げ、

「あげかーじ！」

艦長が命じる。

「総員、上げ舵、注意！」

艦内に警報が響き、みな、とつさに近くの固定物に掴まった。船体が急な上昇で不気味に軋み、何かが壁にぶつかる音が響く。艦は急角度に昇り始める。

「二番艦リレンジより信号。われ参加すべきか否か。わが砲術士、一撃で仕留める自信ありとのこと」

「青二才がすつこんでると言ってやれ！あれは私の獲物だ」

通信士の声に砲術長が怒鳴る。まだ急上昇の最中、間もなく噴進弾も来ようという艦橋の緊張がほんの一瞬緩んだ。ゴルフエが凄み

のある苦笑いで通信士に伝える。

「返信。助太刀無用。引き続き流れ弾に当たらぬ距離にて待機せよ。観戦記録を頼む」

ゴルフエの苦笑は一瞬で消えた。その隣では操舵に艦長が命じている。

「取り舵二点！よし、続いて面舵二点！まだ上げますか？」

浮かぶ岩礁を避けるため、上昇しながら小刻みに艦を動かす艦長が尋ねる。

「まだです」

冷静なゴルフエの答えに艦長は内心舌を打つ。一体何をしたいんだ、ウチの若い親方は？

「噴進弾、着弾します！」

途端に後方で眩い光。続いて船体がグラリ振動する。船体が既に三十度ほど傾斜しているので誰もが身体を何かで支えていたため、新たな衝撃で倒れるものはいなかった。ゴルフエはこれを狙って上昇し続けたのだった。艦長はその大胆な操艦に舌を巻いた。

「損害調べろ！」

後方の見張が冷静に事実を告げる。

「只今の着弾は後方の岩礁。我に向かった四発全て撃破を認む」

ゴルフエはすぐさま、

「艦長、舵並行願います。戦闘速度維持」

「了解」

イクレンドにはまるで数十分に感じたが、時計を確かめれば上げ舵にしてからまだ一分しか経っていない。

「損害ありません」

応急処理班を指揮する副長からの伝令の声を受けた艦長が、

「よろしい。砲撃再開」

既に敵は十発。こちらは四発。敵はあと二から四発、こちらの主砲弾はあと十四発。と言っても使い切るわけにもいかない。

「次で決めるぞ。算定急げ！」

艦長もゴルフエと同じ事を考えていたようだった。この後、あの小物の親玉が控えているのだ。

「偏差、あと一足せ……いや、足す二！」

主砲は敵の位置情報を自動的に入力し、そのまま放っておいても発砲出来たが、昔ながらの砲術長は絶対にそれをしない。宙では机上の計算は当てにならず、現にほとんど当たらない。必ず経験による修正が必要なのだ。

「撃て！」

砲術長が叫ぶと共にトリガーを引く。空かさず発砲の衝撃。そして艦が障害物を避ける動きと。後方に爆発。衝撃波。

「敵弾、外れました！」

そして遂に。

前方にゆつくりとオレンジ色の火花が散った。続けて真っ赤な円形の光。

「命中！」

砲術長が小躍りする。

「敵艦、沈みます！」

「救難、発進。敵乗組みを救助」

ゴルフエは命じると、艦長に、

「ご苦労様です」

「三射もしてしまい、申し訳ありません」

艦長と共に謝る砲術長に、

「いや、これだけの障害物の中、上出来だと思います。これからこの調子で頼みますよ」

待機していた救難チームは、戦隊の他の艦から派遣された救難艇と共同し、二十人ほどのカローン人を救助して来た。カローンの哨戒艦艦長は、命中が避けられないと分かった瞬間に退艦を命じており、その数秒が多くの命を救った。救命艇で漂うカローン兵のうち二名が重傷を負っていたが、ほとんどの兵は掠り傷程度だった。し

かし、艦長と副長は艦と運命を共にしたと言う。行方不明はその二名だけだった。

思いがけない捕虜を全て旗艦に收容したゴルフエは、すぐさま前進を命じた。やがて幾人かの捕虜の尋問から前方に大艦隊がいることを知らされる。

「本当でしょうか？」

イクレンドの問いに、ゴルフエは答える。

「ああ、本当にいるだろうな」

さて、ここからが本番だった。

「戦隊に信号通信。文。われ先行す。間隔を二十宙湮以上あけ、通常航宙速度にて追尾せよ」

二十宙湮も空ければどんなに目のよい見張りも視認することは出来ない。それにここは暗黒礁域。無線通信も測定装置も役には立たない。つまりは単艦、敵の大艦隊がいるという宙域に出て行くことなのだ。

「失礼だが何をお考えで？」

ゴルフエより二十も年上で経験豊富な艦長が尋ねる。ここは権限を盾に黙るよう言ってもよかった。しかし、ゴルフエはそれを潔いとは思わない。

「今は言えない。が、これだけは言っておきましょう、艦長」

艦長を手招き、宙を飛んで来た艦長を支え下ろすと、

「これは高度に練られた作戦の一部です。信じられないかもしれませんが、今は私を信じて欲しい。どんなに突飛なことが起きても」

「それは兵に危険を強いることになるのでしょうか？」

真剣な艦長の目にゴルフエの視線が絡む。

「強いる時には、私は指揮権を行使出来ない立場になっている、と思う。その時は、あなたはあなたの判断で行動してください、艦長」

数時間の緊張した時間が過ぎた。

艦内は戦闘配置のまま、緊張が続く。あと一時間。ゴルフエは緊張に蒼褪めた隣のイクレンドを盗み見ながら思った。この若者のように緊張で己を磨り減らす乗組員が多いはず。いざと言う時に全力を発揮出来ない。あと一時間続け、敵と遭遇しない時には――

「前方に敵艦見ゆ！大型艦が多い、二、四、六……数え切れません！」

見張の声は悲鳴に聞こえた。艦橋の誰もが前方を眺め、最大望遠で前方をパノラマ撮影した画像が映し出されたモニターを覗き込む間違いなかった。カローンの大艦隊が漂う岩礁の合間に一列横隊で並んでいる。

「砲撃準備をしますか？」

艦長は冷静に尋ねた。相手は待ち構えていたに相違ないだろう。

戦闘を命じ、こちらが刃向かう素振りを見せれば、敵は一斉に襲い掛かってくる。そうなれば勝負は一分と経たずに決る。それはそのまま彼らの命の長さでもある。ゴルフエはひと息吸うと、

「いいえ。通信士。敵に向け星系共通信号。文。休戦を求む。捕虜となりし貴星の兵士を送還する。受け入れを願う」

「司令官、本気ですか？」

呆氣に取られた艦長が思わず尋ね、絶対服従すべき通信士もためらった。ゴルフエは声を張り、

「通信！直ちに復命せよ！」

慌てて通信士が発光信号機で敵に向け発信し、艦長は口を噤んだ。

「艦長。連絡艇を用意してくれませんか？重傷の二名を除く先程の捕虜全員を連絡艇に載せてください」

「そうなると、操縦の者以外一、二名しか乗せられませんが」

「それで構いません」

「あちらに向かう人選は？」

「私が行きます」

「ご冗談でしょう？」

ゴルフエは自嘲の笑いを浮かべる。

「心から冗談だったらいい、と思っていますよ」

やがて伝令がやって来る。

「甲板長より伝言です。準備が整ったとのことです」

ゴルフエは頷くと、

「艦長。四時間過ぎても私が戻らない場合、戦隊の指揮権はあなたへ移譲します。私への命令書は私の部屋の金庫の中。鍵はイクレンドに預けます」

「そうならないことを祈りますよ。あなたのためでなく私のためですね。そんなことになったら全員死ぬか降伏するしかない」

艦長の言にゴルフエは肩を竦めると、

「三時間ほど前に私が言ったことを思い出してください。その時は出来るだけ兵員を助けるようにして貰えますか？」

ゴルフエが「では」と歩き出すと、イクレンドと参謀二名、そして護衛の兵二名が一緒に動き出す。するとゴルフエはイクレンドの腕を取り、

「来なくていい。お前たちは残るんだ」

副官のイクレンドは震える声で、

「おひとりで向かわれると？」

ゴルフエは無表情で、

「そうだ。護衛も要らぬ。いいか、私の後を付けるなどと言う馬鹿な事は考えるなよ」

「せめて私だけでもお連れください、お願いです」

ゴルフエがイクレンドの顔を見ると、その顔は泣き出さんばかりだった。

「大丈夫だ」

ゴルフエは彼の肩を叩くと、
「むざむざ死ぬために行くつもりはない。捕虜を置いてあちらの名高い司令官の顔を拝見するだけだ」

そこでゴルフエは小声になると、

「私にもしもの時があつたら、フウルフエ様にこれを」

それはゴルフエが常に右腕に付けていた飾鎖で、カスケーの成人男子が一人前と認められたとき、居住区の長老から渡される徴^{しるし}だつた。

「司令官……」

「行つて来る」

「司令官！」

「後は頼んだぞ！」

こうしてゴルフエはたった一人、捕虜を二十名ほど載せて満載の小艇で前方の巨大な艦隊を目指した。先ずしたことは捕虜たちの縛めを解く事で、手かせを外された捕虜たちは訝しげにしながらも大人しく座席に座っていた。ゴルフエは操縦席に座つて、相手の旗艦と思しき船の方向を目指し、自動操縦に切り替えた。

それはたった十分に満たない航宙だつた。

その時、唐突にフウルフエとの別離を思い出す。

あれからまだ十日も経っていない。

慌しい任務受領と出港準備。戦隊に所属する四隻の艦長たちと打合せをする時間すら僅かで、それぞれの役割を確認するのが精一杯。青二才で経験も少ない上司の下、参集した艦長は全てゴルフエより年長で、旗艦の艦長に至つては二十数年も先輩に当たつた。

只でさえ数百人を飛び越して戦隊司令官に任命されたゴルフエ、それも任務の性格上から昇進を得たに過ぎない。艦長たちは面白い

はずもなく、あからさまに敵意を向けはしないものの、初対面はよそよそしく他人行儀の、相互にあまり気持ちのよいものではなかった。そしてゴルフエにとって大切な情報であるはずの彼らの性格や人となりを知る時間もなかった。

そんな多忙の中で、なんとか半日の時間を割き、フウルフェと話す。ゴルフエは何の説明もなしに彼女を首都を見下ろす丘陵に連れ出し、別れを告げた。

「隠すつもりはありません。これが永久の別れとなるかもしれませんが」

フウルフェは顔色ひとつ変えなかった。

「軍人として義務を全うする時が来てしまいました」

ゴルフエはそつとフウルフェの手を取り、

「どうか、私のことは忘れていただきたく、お願いします」

「覚悟はしていました」

彼女は落ち着いて言うつと、

「正直、こんな日が来ることは、最初から分かっておりました」

「そうでしたか……」

「あなたはカスケーを救う方と信じておりましたから」

二人は丘陵をゆっくりと歩く。黄太陽の暖かな陽射しが紅い空を輝かせる。見下ろす首都の街並みは戦争間近とは思えない穏やかな風景に見えた。

「私の父はどうしても娘に甘くて」

フウルフェがぼつりと言う。ゴルフエは手をつないだまま、立ち止る。

「私とあなたとの付き合いを咎めませんでした。父は同僚からどんなに責められたことでしょう。軍との接点は危険だ、と」

「私にも匿名の警告がありましたよ」

ゴルフエは自嘲気味に、

「反対勢力との付き合いは身を滅ぼすぞ、とね」

「まあ、それはお気の毒」

二人は声を揃えて笑う。二人の仲は、そのような中傷や非難を遥かに超えていたのだった。やがてフウルフェは真顔に戻ると、

「私は、幸せでした。あなたは私にこの星の素晴らしさを再発見させてくれました」

フウルフェの声に微かな震えを感じたゴルフェは緊張してその手を強く握る。フウルフェも握り返し、

「どうぞ、存分に働いてください。私は影で見守っております」

「私に甲斐性があれば……もう少し時間があればあなたと」

「しい」

フウルフェがゴルフェを止める。言っても虚しいことを言いかけたゴルフェは己を恥じて、

「申しわけありません」

「いつか笑って話せる時も来る事でしょう。その日を待ちましょう」
フウルフェは真っ直ぐにゴルフェを見る。ゴルフェは思い切りフウルフェを抱き締める。

「さようなら、フウルフェ」

「さようなら、ゴルフェ」

キューイン・ キューイン・ キューイン

船舶接近警告音にはつと我に返ったゴルフエだった。彼がもの思いに沈んでいる間も連絡艇は無害を示す白い点滅灯を示しながら大艦隊にゆつくりと接近していたが、それも終点が近かった。

目前にカローンの哨戒艦が二隻立ち塞がっていて、発光信号で停船を命じていた。ゴルフエが艇を止めると、哨戒艦の一隻からワイヤーがするすると伸びてくる。その先端がゴルフエの艇にぴたっと張り付くと、船体から声が聞こえた。

「カスケーのフネ、聞こえるか」

なまりの強いカスケー語に対し、ゴルフエは艇の船体を通して発信する音声装置を通じて流暢なカローン語で答える。

「よく聞こえる」

「所属と目的を申告しろ」

ゴルフエはすうつと息を吸い込むと、

「私はカスケー宇宙軍の上級統率官、ゴルフエというものだ。カローン軍の方々に火急の連絡がある。指揮官にお目通りをお願いしたい」

カローン艦隊の旗艦は意外にも中型の戦闘艦で、戦闘力は並だが運動性と速力に優れた船だった。この艦隊の長は合理主義で通っている。こんな危険域に艦隊決戦用の大型艦で繰り出すようなことはない。ゴルフエはこれからその男と対決しなくてはならないのだ。ゴルフエの艇は哨戒艦と共に旗艦の横に並び、ゴルフエは捕虜に命令があるまでここにいと命じた後に、旗艦から伸びて来た蛇腹型の接舷口から乗艦した。

柄と鞘に封印が張られた儀礼用の短剣以外、武器を没収され、周

りを六名の屈強な兵士に囲まれて、それでもゴルフエは胸を張って艦橋に昇った。

待ち受けていたのは、カローン帝国第三方面軍に属する精鋭、ストラー支隊司令官のストラー大公。

兵に囲まれたった一人でやって来た野蛮なカスケーの若造に、ストラーは堂々とした声で、

「一体なんの用だね？」

国王の従弟に当たるストラーは尊大に含み笑いをすると、

「せっかくカスケー軍のルージ前進砦を見物しようとして来たというのに」

すると周囲から追隨の忍び笑いが漏れる。ゴルフエはそれを無視して声を張った。

「ご公務の邪魔立てをして申し訳ありません」

そして堂々とストラーの視線を受けた。

「先程、貴下の艦艇と小競り合いを演じました。残念なことに一隻撃沈せねばなりません。脱出した乗員は負傷者のうち危険な者二名を除き全員、連れて参りました。直ちに収容をお願いします」

「何？せっかく手に入れた捕虜を手放すと言うのか？」

「はい。どうかお納めください」

ストラーはじつとゴルフエを見つめた後で傍らの副官の一人に指示し、副官は艦の士官数名と捕虜を収容するため艦橋を出て行った。ゴルフエはそれを見送ると、

「私が閣下に拝謁を願ったのは、捕虜の受け渡しのためだけではありません。小官はカスケー総軍司令部より命を受け、閣下に火急の連絡を持って参りました」

「ほう。現在戦闘中の相手方から至急の連絡とは、な」

ストラーは余裕をみせて立ち上がると、

「それとも何か？貴官の上官は私の来ることを知って慌てて降伏を申し入れるために貴官を遣わせたのかな？」

艦橋内に笑いが満ちる。彼以外周りはすべて敵、屈辱の瞬間だっ

たがゴルフエの表情は変わらない。変わらず苦悩の色を浮かべ、

「いいえ。我等は未だ主力を保ち、辺境地区の小競り合いでは互角以上の成果を上げていたことは閣下もご存知のはず。私が参じたのはそのような理由ではありません」

「では、何故に参ったのだ？」

と、これはストラーの参謀の一人。

「降伏ではないとしたら、一体何の用だ？」

賛意のどよめきが起きる。ストラーは右腕一閃で静寂を取り戻すと、

「戯れが過ぎたようだ。申し訳ない。貴官の至急報とやら、こちらに」

ゴルフエは親書を副官に差し出し、副官はストラーに恭しく捧げた。

受け取ったストラーは伝統に則って上質のカスケー白紙に記された達筆に目を通す。ゴルフエはその表情の変化を見逃すまいとストラーの顔を見つめていたが、最期まで黙読したストラーの表情は一切動かなかった。

読み終わったストラーは親書を丁寧に畳み、副官に手渡すとゴルフエに問う。

「さて、貴官はこの親書に何が記されているか、知らされているのか？」

ゴルフエは落ち着いた表情で答える。

「一切を存じております」

「では、改めて貴官の口から事の次第を伺っても宜しいか」

ゴルフエはすうつとひと息吸う。その息を吐き出すまま、告げる。「閣下。貴国の皇太子であり光輝ある帝国軍最高司令官、アルフェル・コト・ソーフ殿下が崩御なされました」

一瞬にして緊迫した空気が支配する。ストラー以外の誰もが啞然と声を喪うが、その呪縛を解いたのはやはりストラーだった。彼は噴出するように笑い出す。吊られた数人が笑い出すと、艦橋に参集し

たカローンの兵士たちは一同笑い転げた。

「親王殿下が崩御なされた、と？申し訳ないが、統率官殿。私はつい数日前に親しく親王の傍らに侍ることを許されていたのだ」

ストラーの顔から徐々に笑みが消え、険しい何かが、その一睨で一千の兵士を動かすと謳われた英傑の貌が現われる。

「その時、私は殿下からルージ攻略の命をありがたく受けたのだ。

殿下はすこぶるお元気で、ルージを抜いたあかつきには御自ら親衛兵を率いて貴官らの首都攻略に出撃すると仰っていた。その殿下が崩御あそばされた、と？」

ストラーの怒りは次の一喝に託された。

「ふざけるな若造！」

しかし痺れるような怒声を浴びても、ゴルフエは落ち着いていたもの。「閣下が信じられぬのも無理はありません。私も耳を疑ったものです。この親書は昨日、私がルージ砦を発つ直前に届きました。貴軍の機密通信を傍受した我が通信隊は暗号解読して直ぐに最高司令部に伝え、事の次第を知った護民官閣下が自ら認めたのです。それによると、殿下は率いた親衛艦隊ごとこの暗黒礁左翼、我々のいるトガン礁域から一日の距離にあるナンダバル礁域にて暗黒陷穽に嵌り、乗艦が消滅したとのことです」

「なんだと！」

ストラーの参謀長が表情を変え、

「殿下が出撃するなどとは聞いていなかったぞ！」

ゴルフエは首を振り、

「詳しい事情は私ごとには分かりません。通信は我が軍情報部の推測として、崩御の報を受けた貴軍の第四艦隊と第十一艦隊は一旦、暗黒礁の周囲に敷いたカスケー包囲の陣を解いてカローン方面に退却するしかないだろう、としており、我が先鋒艦隊のいくつかがそれを確かめに偵察活動を開始した、とのことでした。もしその通りとなれば、閣下。閣下の艦隊は後続もなくこの暗黒礁のなか、孤立していることになります」

落ち着き払ったゴルフエの声にしんと静まる艦橋。長い対峙の後、ストラーは静かに話し出す。

「この親書が真実を述べているとは限らない。また、ここではこの書類の真贋を確かめる術もない。そして、この通信も遮断された暗黒礁域では……」

ストラーはずっとゴルフエを指差す。

「貴官の話を確かめる術はない」

じろりと通信参謀を見て、頷きの肯定を得たストラーは、

「しかし貴官が真実を語っているか否か見極める術は、ある」

ストラーの両脇に控えた護衛の兵が数名、察しよく、じり、とゴルフエとの距離を詰める。

「最近の科学の進歩は驚くべきもので、ある種の薬液を体内に取り込めば、その者は何でも問われたことに真実を持って答えるようになる」と言う

ストラーの薄い灰色の瞳が一層薄く見える。

「どうだね。験してみるか？」

ゴルフエの蒼い瞳は揺るがない。

「閣下がお望みとあらば、その屈辱、お受け致しましょう」

微かなざわめきが周囲から起きる。するとゴルフエは続けて、
「しかし、そこまでお疑いとあらば、その前に、私が真実を語っていることを証明する機会を与えては頂けないでしょうか？」

「ほう。どう証明する？この一切の通信を遮断され、双方味方から距離をおいた不毛と暗黒の空間で、一体何を証明出来るのだ？」

ストラーは最早温情の欠片もない状態で、冷え切った眼差しに恐ろしい威圧を込めてゴルフエを見ていた。そして、これこそがゴルフエが避けたいと願った展開、逆に謀略家のモリヨフ力が願っていた展開だった。

「ストラー閣下」

ゴルフエが折った膝を伸ばし立ち上がると護衛の兵が自然ストラーとの距離を狭め、ゴルフエがよからぬ企てを実行しても防げるように身構えた。そんな護衛など存在しないかのように、ゴルフエは尚も数歩距離を縮める。そして副官が座っていた席の前まで来ると左の掌を筆記用の小卓の上に広げた。

何をするのか、といぶかるいくつもの目の前、ゴルフエはいきなり儀礼用の短剣を取り出し封印を切ると、ためらいもせずその刃を自らの指に当てた。それはストラーの機敏な護衛たちが取り押さえようと動くよりも一瞬早く、肩を押さえられ、短剣を取り上げられた時にはゴルフエの左手四本の指のうち、二番目に短い指が卓の上に残されていた。

血しぶきを上げる左手を無頓着に眺めてから、ゴルフエは押さえつけられた格好のまま、ストラーを仰ぎ見た。ストラーの表情は全く冷静そのものだったが、直前に見せていた冷徹な表情は消え、何ともいえぬ奇妙な表情になっていた。

「離してやれ。軍医を呼べ」

「いえ。医者は要りません」

ゴルフエは開放されると、胸元から小布を取り出し、血の吹き出

る指の根元をきりきりと縛った。

「無理をするな。放っておけば指ばかりでなく手を失うぞ」

「信義を失うよりはましです」

「ほう」

ストラーはふつと笑うと、

「私の知る限り、カスケー人は左手四本の指のうち、内から三番目の指に心が宿っている、と信じているそうだな。もちろん本気ではないだろうが、そういう風に言い伝えられ、誓約をする時には、この左三指にかけて、と言う。その通りかな？」

「その通りです」

「貴官は己の心を切り落とした、と言うわけだな。それは何故か」

ゴルフエは身振りで机上の指を示し、

「その指、閣下に献上致します」

出血と痛みに蒼白となりながらもゴルフエはしっかりした口調で、

「私の心を、差し上げます」

「それで、貴官を信じろ、と」

「さようです」

ストラーは奇妙に醒めた目でゴルフエを見つめていた。ゴルフエは汗が額を滑り落ちるに任せ、じつとストラーの肩口を見つめていた。やがて。

「よく分かった」

ストラーは得心したように大きく頷くと、

「どうやら貴官に嘘はないようだ」

ストラーの言葉に参謀の一人が驚きの声を上げる。

「閣下、こんな若造の話を信用なさるのですか？」

「武人が信義を賭け、その証に自らの心を捧げたのだ」

ストラーは声高に言つてその参謀の口を封じる。そして指を押さえて直立するゴルフエを見て、

「もう一度聞く。その話に嘘はないな」

「ごさいません」

「貴官の信義に懸けて」

「はい。この切り落とした指に懸けて」

するとストラーはがっくりと膝を落とす。あわてて数人が駆け寄ったが、それを抑えて、

「私は殿下が幼年舎に入った年に、陛下のお傍近く侍ることを許された。直ぐに陛下をお慰め申し上げなくてはならない。通信が回復する宙点まで後退する」

ゴルフエは指を押さえたままカローン兵に囲まれて自分の連絡艇まで戻った。接続ハッチまで見送ったストラーは、ではこれで、と頭を下げるゴルフエを見ると、

「少し離れている」

兵と副官を下げて人払いをする。そしてゴルフエに寄ると、

「見事であつた。これを考えた者は軍人ではないな」

ゴルフエの表情は困惑に変わり、

「何を仰っていますか？」

ストラーは苦笑すると、声を潜め、

「まあよい。貴官も武人であるなら氷のような規律と炎のような闘志が勝利には必要だと知っておろう。気付いたはずだ。貴官のその行動が、ウチの兵に与えた影響を。単純な行動は単純な思考には大きく響く。彼らはいくら私が否定しようと、殿下の艦隊が殲滅されたとはい込んでしまった。艦橋から既に艦隊へと噂が広がっていることだろ」

やれやれとストラーは溜息を吐き、

「ここまで士気を挫かれては立て直し、出直さないわけにはいかな
いからな」

そこでストラーは更に声を落とす、

「それにしても残念だな。貴官のような立派な男がこのような下賤な任務に充てられるとは。もっとも、貴官ならばこそ為し得た任務ではあるが」

ゴルフエが装う困惑の表情は変わらない。

「お褒め頂いているとは思いますが、私には何のことか」
するとストラーは頸を振り、

「無駄だ。全くの無駄遣いだ。これで稼げる時間など、刑場の露と消える罪人が最期に足掻いて数分の時を稼ぐに等しいぞ。見苦しいだけで結果は変わらない」

ゴルフエは必死で表情を留める。ストラーはそんな彼の姿を吐息混じりに見遣って、

「またやって来よう。近いうちに必ず。その時は干戈を交えよう」
ストラーは残念だ、と繰り返しながら、行け、と促しその場を離れる。ゴルフエは血が滴り始めた指の包帯を見つめながら、最後まで表情を緩めなかった。

怪我を押してひとりで連絡艇を扱うのは骨が折れた。意地でも弱みを見せまいと失血のために朦朧とする意識の中、誰の助けも借りず連絡艇に乗り、操縦席に座る。ひとり連絡艇を操りながらなんとかストラーの旗艦から離脱し、方向を自分の戦隊に向けると、自動操縦に移し、ようやく一息入れる。途端に膝から力が抜け、思わず前のめりに崩れそうになるのを不思議な思いで見ている。こんなに疲労感を覚えることは宙軍の幼年学校に入った初年生の頃以来だった。

「指の一本くらいなんでもない」

ゴルフエは独り言を呟くことで意識が混濁に陥ることを防ごうとしていた。

「私の身体は航宙軍に入ったときからカスケーのものだ。星のためなら腕の一本くらい」

ゴルフエは揺らぐ視線をモニターに据え、痛みに耐える。

「そして、それは」

堪えるのは指の痛みだけではなかった。

「指などより大切な私の信義も、だ」

我知らず、目尻に涙が湧き出ていた。

「カスケーは私のつまらない虚栄の数千倍素晴らしい存在だ！」

ゴルフエはひとり子供のように泣き出した。

二日の後、暗黒礁域航路のカスケー側入り口を扼する前進砦に着したゴルフエの戦隊は、そこにいた多くの艦船から歓呼の声で迎えられた。左手を袋で覆ったゴルフエが艦を降り立つと直ぐにひとりの士官が寄って来て声を掛ける。

「上級統率官。こちらへ」

イクレンドが続こうとすると、

「貴官たちは別の者が案内する」

それを合図にばらばらと兵が十数人やって来て、イクレンドたちとゴルフエの間に壁を作った。見ると接岸ドックの周囲にもいつの間にか武器を手にした兵が大勢配置されており、その一部は停まったばかりの艦に乗り込んで行く。

「どういうことだ？」

士官の所属を徽章から知ったゴルフエが厳しい声で問い質す。

「我らは何か嫌疑を掛けられているのか？」

「そうではありません」

総司令部直轄憲兵隊の士官が答える。

「ただ、第四十四特別戦隊はこの先の停泊域で追って指示があるまで待機せよ、とのことですよ」

「隔離だな」

「再編の間、待機するだけです」

ゴルフエはもういい、と憲兵士官を黙らせると、素振りで離れた場所へ誘って、

「事情は理解している。だが、あの者たちは何も知らん。私のこの怪我にも大騒ぎをしたくらいだからな。調べるのは結構だが、正式な命令書にも作戦内容は記されていないのだから、副官や参謀を始め戦隊の誰も仔細を知らない。どうか早めに開放してやってくれ」

しかし憲兵はにべもなく被りを振って、

「それは調べてから判断致します。どうぞこちらへ」

ゴルフエは憲兵に案内された別室で待っていた、司令部からやって来ていた参謀に仔細を教えられた。

いわく、ゴルフエの戦隊は暗黒礁域で「司令部作成による奇襲作戦」を実施、敵の先鋒艦隊に大打撃を与えたことにされていること。その際、戦闘を陣頭指揮していたゴルフエが負傷したことになっていること。ストラーに対し行った策略は一切秘密とされること。戦隊全体に緘口令が敷かれ、十日ほど監視の下隔離が行なわれること

……
ゴルフエは重い表情でその部屋を出た。待っていた先程の憲兵士官が、

「では、こちらへ」

そして小声で、

「これから基地司令官にお会いしますが、誰も、司令ですら事情を知りませんのでそのつもりで。うまく口裏を合わせてください。いいですね？」

もう二度と、自分は明るい日向を歩くことは出来ないだろう。嘘に塗れた人生、薄汚れた陰を歩くことだけが待つ未来。

軍を辞めるしかない。ゴルフエはそう思いながら、ただ、ただ静かに頷くだけだった。

「ゴルフエ！よくやった！」

前進砦の司令官は満面の笑みでゴルフエを迎え、親しげにその肩を叩いた。

「これで我らの勝ちだ」

しかしゴルフエは憂鬱そうに首を振り、

「カローンは強いです。安心するのはまだ早い、と思いますが」

それに私はこの後、辞任する……すると司令官はにんまりと笑みを深くする。自分だけが知っていて相手が知らない手品の種を暴くのはいつでも楽しいものだ。

「そうか、貴官はまだ知らないのだな」

「この二日間、他に何か進展があったのですか？」

「おおありだ。つい数時間前、司令部より通達があった。暗黒礁域へ強行偵察に出していたホーミネロがアンシュレ砦に帰還して報告したそうだ」

突撃艦ホーミネロの艦長はゴルフエと同期だったはず。アンシュレ砦はこのルージ砦に次ぐ大きな前進砦で、ここから二日の距離にある。指揮官は少しの間ゴルフエの訝しげな表情を楽しんだ後で、

「カローン皇太子アルフェルの艦隊が暗黒陥穽に捉まり、大損害を受けたそうだ」

「え！」

「場所は暗黒礁左翼、ナンダバル礁域だ。アルフェルの艦隊は暗黒礁域を強行突破しようとしていたらしく、わが精鋭の特殊作戦班が仕掛けた罠にまんまとはまって、暗黒陥穽多発宙域に迷い込んだという。艦隊の半数が陥穽に飲まれ、逃げ帰った艦も岩礁に砕かれ大破遭難する艦が続出、結局百隻近い艦隊は二十隻程度しかアーケガルにたどり着かなかったそうだ」

カスケー星域次席護民官パ・ラ・シレット氏は五十歳。平均寿命が八十のカスケー人ではまだ中年と呼べる働き盛りだった。

戦いではなく、話し合いでカローンとの紛争を収めようと言う彼らの主張は、カローンとの対立激化と共に護民官ら主戦派に押されはしたものの、民衆は次席護民官たちの主張に同調する者の方が多かった。

カローンは大国でありこの星系で「人」が棲息可能な地域の七割を支配し、人口はカスケーの倍以上。軍隊も強く、カスケー軍も準備怠りなく訓練に励んでいたものの植民地の獲得や反乱の制圧などで鍛えられたカローン軍と比べれば装備も経験も劣っていた。

庶民は虚しい戦いより平和を望み、そのためには多少の不便やカローンへの譲歩も止む終えまいと考える。第一、不毛で恐ろしい暗黒礁域など欲しがるのならカローンにくれてやればいいのだ。それが障壁となりカスケーの平和が保たれているという護民官の主張は理解出来るが、壁を守るために家に火を放たれては敵わない。

次席護民官の語る根強い交渉と話し合いによる宥和という図式は、軍事費の増大と徴兵の実施によって疲れ切った民衆には理想の絵と見えていたのだった。

しかし、次席護民官側にも問題があった。第一にカローンとの交渉は完全に行き詰まっており、カスケーは余程の譲歩をしない限りカローンの対決姿勢を緩ませることは出来そうになかった。第二に、そのことは次席護民官たちにも痛いほどよく分かっており、同士たちの中には護民官派に揺さぶられ中間派に鞍替えしたり、護民官派へ寝返る者すら現われていた。軍からは一部の者の支持はあったものの、大勢は護民官の方を向いていた。

理想を追う者ではあるが決して夢想家ではない次席護民官は悩んでいた。理想を追求するあまり、最早回避不能なカローンとの対決を前に国を二分してしまっているではないか。今や交渉での解決はありえないだろう。どちらかが折れるまでこの緊張は続き、それは国力に勝るカローンに有利となる。既にカローン軍はカスケー攻略の部隊編成を終え、命令一過、犠牲を省みずに暗黒礁域へ殺到する勢いだと聞く。

こうなったのも、あのプライドの高い護民官が示した僅かな譲歩——農務大臣のポストと交換に対交渉大臣のポストを次席護民官派へ渡すという——を断わったからだ。あの時、それを受けていれば、ここまで手詰まりにはさせなかったものを……

次席護民官、シレット氏はひとり自責の念に苛まれていた。

そんな矢先。護民官がたった一人、護衛も連れずにシレット氏の本宅を訪れる。カスケーがアーケガルからのカローン軍撤収を求めるちょうど一日前のことだった。

「シレット殿。最早話し合いだけが解決の道ではないことは先程貴殿も認めた通りだ。ここに至れば干戈を交えることを厭うわけには行かなくなる。いや、あなたの言いたいことはよく分かっている。それでも実際に最初の一発目が放たれるまでは粘り強く妥協点を探る、それは外交の義務というのも理解しているよ。とはいえ、その時に備えないわけには行かない。それをしないと言うなら、既にカローンの軍門に下る意思を示すことになる」

護民官の力説が続いていた。

「私は長い間この時のことを想い、憂いでいた。カローンは強い。誰もが知っている。カスケーが勝利するには奇跡が必要だ。正にあなたの主張通りだ」

護民官の話は終わりに近付いた。彼の前にゆったりと腰掛けた次

席護民官のシレットにはそれがよく分かった。この政敵のことは実の兄よりよく知っていると云ってもよい。この公称年齢五十五の男が会話の最中に背を反らせて顎を引くときは話の締めを探っているところだ。

シレットは護民官相手の長年の対立と均衡を保つための政争の中、その性格から性癖に至るまで、それこそ表に出せぬような話まで知っていた。もちろん、相手側も同じく彼の事を知り尽くしているの
で、それを種に彼を貶めることは出来ない。これが政治的均衡と呼ばれるものの正体だった。

シレットはそのようなことを想い、皮肉が顔に現われぬよう気を
使いながら、相手の語句に潜む罖を自然と探っていた。

「この奇跡を演出するため、ここは挙国一致で協力しなくてはならない。あなたの協力が必要だ」

護民官は身を乗り出した。こちらの話は終わった、という合図だった。

「それで、私にどうしろと？」

護民官から一方的に長い話を聞かされたシレットは静かに問う。

護民官は居住まいを正すとずばり言い放った。

「頼む、シレット殿。カスケーのために汚れ役を引き受けてくれな
いだろうか？」

護民官がシレットの館を後にしたのは、その三時間後のことだった。既に夕闇が迫り、部屋の中は暗かったがシレットは灯りも点けず
にひとり座っていた。

「これで本当によいのだろうか？」

護民官の話は罖に溢れていた。彼が話したカローンに対する謀略は一度聞いた限りでは突飛に過ぎて絵空事にしか思えないものだった。しかし、護民官が珍しく端折ることなく詳細に説明したその作戦は、知れば知るほど魅力的であった。護民官の言う通り、餌が大

物ならばカローンは必ず食いつく。そうならば緒戦でカローンは大打撃を蒙り、早期講和に動くだろう。

それは毒の花が甘い香りを漂わせるように、シレットを誘っていた。

「毒はうまく用いれば薬になる」

対カローンとの外交は既に手詰まり。最早妥協はなく、どちらか一方の献上だけが受け入れられる状態に進んでしまった。

護民官派の強気な外交がこの事態を招いた。シレット派が外交の実権を握っていれば、こうなる前に落とすところを見つけ、お互いが傷付かぬ軟着陸点を見つけられたはず。もう何百回も悔やんだことだったが、思わずにはいらなかった。この先にあるのは戦争、それだけだった。

戦争だけは食い止めなくてはならない。なんとしてでも。そう心に誓った矢先の護民官の来訪。

「しかし、この毒。私が飲み込んでいいものやら」

私以外にもこの役が務まる者はいるはずだった。護民官ですら強力な候補だ。しかし……

「毒を飲め、と他の者に言うことが出来るか」

この役に最も相応しいのは彼自身だった。長年カローンを敵視して来た護民官を筆頭にした政府主流派の誰かがこの役を引き受けても、カローンが吊られる可能性は低い。

一方、反対勢力の誰かが引き受けたとしても、それが対外的に知られた人物でなければ可能性は同じく低くなる。となれば、それが行えるのは二、三名に絞られる。中でも彼自身は最高の人選だった。この作戦を行うのであれば、それは彼を置いて他にはない、護民官はそう言った。そしてそれに反論することは、相手に臆病との印象を与えることにもなる。それは護民官の罠だ。誇りと勇気を疑われることは政治的にかんりのマイナスとなる。いや、政治的以前に、彼自身がその屈辱に耐えられるかどうか……

「毒を飲め、とは言えない」

自分がやるしかないのだ。この罠を引き受け、それによってカローンと道連れにする。そしてカスケーを救う。カスケーさえ救えれば、それでいいではないか？

次席護民官は暗い部屋で一人、無理やり自身が得心するように考え続けた。

しかし、巧妙に練られた罠は、次席護民官がカスケーを憂うあまり作戦の出来栄え自体に引き込まれ、その先の世界、カスケーがカローンと引き分けた後に訪れる世界にまで考えを及ぼせることに至らないよう仕組まれていた。

それは護民官と軍だけが勝利の栄光に包まれるという未来だった。

深夜。極秘の通信が護民官の下に届けられる。次席護民官から、その伝言には「お受けする」とだけあった。

護民官はひとり笑う。これで彼の部下たちも安心することだろう。

フウルフェが髪を振り乱してその扉を叩いたのはその二日後の夕刻。

扉が開くと男が一人。フウルフェと認めると何も言わず仕草で付いて来るように促す。

暗い廊下を歩くことしばし。重い扉が現われ、その前に立った看守は、案内する男の一瞥を受けてその扉を開く。すえてかび臭い匂いが漂い、それに長い間身体を洗わない者が放つ臭気が混じりあい、気分が悪くなる。思わずたじろいだ己を叱咤して、フウルフェは男に続いて扉を抜けた。

その部屋は頑丈な扉で鎖され、細い覗き穴から灯りが洩れている。男は無言のまま扉の前から退き、フウルフェが中を覗けるようにした。恐る恐る覗くフウルフェはしかし、直ぐに覗き穴から飛び退き、口を押さえる。そして意を決し、もう一度覗いた。今度は己に強いて身を引かなかった。

そこにいたのは、ぼろぼろになった衣類をまとった中年の男。ほとんど全裸に近い姿で岩石むき出しの床に項垂れて座っている。しかし、姿に反して怪我や血の跡は見えない。顔もきれいなままで彼女はほっとしたが、直ぐに尋常ではないことに気付く。男の周りは糞尿で覆われていて、半裸の男はその中に虚ろな表情で蹲っているのだった。

「安定剤を投与してようやくこの状態で」

いつの間にか案内の無口な男の隣にもうひとり、男が立っていた。「何があったのか、教えて頂けませんか？」

フウルフェは覗き窓から父を見つめたまま尋ねた。

「どうしてこんなことに？」

「ここではなんですから。どうぞこちらへ」

離れ難い様子のフウルフェに男は優しく、

「お父様は大丈夫です。もう少し落ち着いたら、多分掃除も出来るでしょう」

そうは言うものの、安定剤を打たれ放心している者をどうして放置しているのか、その説明はない。結局、父親は何かの罠にはまっていたのだろう。

「分かりました」

フウルフェの声は上流階級にふさわしい伶俐なものに変化する。

「案内なさい」

そこに待っていた者は意外な人物だった。

「申し訳ない」

開口一番、その初老の男はうるたえながら謝った。

「仕方がなかった、フウルフェ」

「大臣……」

それは次席護民官派でもフウルフェの父の片腕と目された男で、今は財務大臣をしている。

「知ってしまったからには、告発するしかなかった」

「当然だな」

もう一人は座ったままだった。

「告発しなければ同罪だ」

それは警察大臣。敵対勢力からは護民官派の番犬と揶揄される男だ。

「何を見たのですか？」

フウルフェは毅然としていた。

「父が何か悪事を働いたとでも？」

「その通りだ」

警察相は厳しい顔で、

「次席護民官、ああ、あなたの父上は敵と内通しようとした罪で逮捕された」

「敵？」

「カローンだよ」

「何を証拠に？父は戦争には反対していますが、心からカスケーのことを案じ、愛しています」

「財相殿。説明されるがいい」

警察相は踏ん返り返って不敵で不快な笑いを浮かべていた。

財相の話は、フルフェには俄かに信じ難い話だった。

次席護民官に呼ばれた財相は昨日の夜、彼を自宅に訪ねた。次席護民官はひとりで家にいたという。フルフェの母である妻を亡くして以来、ずっと一人で暮らしていたが、数人の使用人を雇っていて、一人になる事は珍しかった。

財相が玄関で呼びかけても何も反応がなかったため、鍵の掛かっている玄関から館に入って主人を探すと、シレット氏は書斎でひとり酒を飲んでいたという。そして驚愕することを言い出したのだという。

「彼は私に、一緒にカローンへ渡ってくれ、そう言ったのだ」

カローンへ渡りカスケーを、自治権を持つ保護領とするよう申し入れをする。このままでは強硬派の護民官たちが星を窮地に追い込んでしまう。カスケーはカローンとの戦闘ですぐさま兵力を減らし、カローンは暗黒礁域を超えて砲台を建設し、なぶるようにカスケーへの砲撃を行うだろう。

そうなつてからではもう遅い。カローンは暗黒礁域を超える時やカスケー軍との戦闘で失った兵の血の代償を求める。それはカスケー人の虐殺に他ならない。だから、未だ戦闘が本格的でない内にカローンへ譲歩して平和を得るのだ、と。

「私に何が出来ただろう？本気か、と尋ねれば、本気だ、と」

財相の顔は疲労に歪んでいた。そして溜息交じりに告げる。

「あなたは逮捕されたいのか？と尋ねると、逆に、君は私を売るか？と……」

シレットはやるならやってみろ、と財相を怒鳴りつけた。そんな

ことは若い頃、大いに話し合い友情を深めた三十年前からなかったことだった。フウルフェですら、父が怒るのを見たことがほとんどない位なのだ。

次第に激高した次席護民官は財相を突き飛ばし、なおも正論を振りかざして、一緒に来い、と叫んだ。家具を蹴飛ばし、書類を投げつける。しまいには自分の胸を叩き続け、テーブルに額をぶつけ始めたという。

「私は急いで警察を呼ぶしかなかった」

保護され、連行されたシレット氏はいよいよもって暴れ回り、押さえ付けるのも三人がかりだった。自傷を防ぐため拘束具を付け、監房に入れ、縛り上げた。やがて医師が呼ばれ、安定剤を投与したのだった。

「重圧が……カローンからカスケーを護らねばと言う想いが、次席護民官殿を追い込んだのだと思う」

やはりフウルフェには信じられなかった。あの父がそのような行動を取るとは絶対に信じられない。そして、父を信じるのならこれは謀略だった。父は何かの薬物を投与されたに違いない。父を落としめる汚く恐ろしい罠。

睨みつける目をした娘を警察相は傲慢な態度で見ていた。どうもこの娘は父親の血を色濃く受け継いでいるようだ。ならば、護民官の立てた計画の第二段階に進まねばならない。

警察相に案内され連れて行かれたのは、彼女の父が閉じ込められた監房の更にある建物だった。そこは確か軍の特殊部隊が使用する隊舎で、今は非常時のため、どこへ出かけたのか隊舎はもぬけの殻だった。

「ここで待っていていなさい」

会議室のひとつに案内すると、警察相は逃げるように去って行った。すると入れ替わりに数人の男女がやって来てフウルフェの前に立つ。

「護民官様。これは一体どういうことです？」

この星の責任者であっても、フウルフェは物怖じせず立ち向かう。「そう怖い顔をしないでくれ、フウルフェさん」

「父をどうするおつもりですか？こんなことが許されるところだと思いますか？」

護民官は首を振る。

「私に当たられても困るね。証言はあなたの父の三十年来の同士である財相から出ている。これが私の側近だったら、真実であってもさぞかし嘘に見えたことだろうが……大丈夫だ、フウルフェ。公表はされない。父上は病気で入院したことにする。実際、あの様子では治療が必要だ」

「そう言つて、父を無きものにしようというのですね」

護民官は唸つて、

「どうもいけないね、フウルフェ。私は何も悪いことなどしてないよ。そういう態度は身を滅ぼしかねない。まあいい。ところで……」

……

護民官は静止撮影画を取り出し、フウルフェの前に置く。

「この男を知っているね？」

フウルフェは表情を変えないようにするのが精一杯だった。

「さあ……どうでしょう」

「嘘を吐かなくてもいい。有名な話じゃないか？次席護民官の娘が宙軍の若手ホープと付き合っている、という話は」

画像のゴルフエがこちらを見てはにかんだように笑っている。何かの祝宴での一枚で、こんな時にもそのゴルフエの制服姿をほれぼれと見てしまうフウルフェだった。

「何でもご存知なのですね」

諦めたフウルフェは冷静に護民官へ視線を送る。

「そうでもないがね。あなたとこの上級統率官の付き合いは三年前から噂には聞いていたよ」

「で、彼がどうしたのです？」

次の言葉を、フウルフェは絞り出すような勇気で言った。

「彼までもがあなたの排すべき標的なのでしょうか？」

最早、護民官も建前を崩していた。

「とんでもない、フウルフェ。彼はわが宙軍の至宝だよ。正義感に溢れ、常にカスケーの大義を念頭に任務へ邁進する。あの思い切りの良い判断。その指揮振り。実に見事じゃないかね？」

護民官はゴルフエの画像を指先でこつこつと叩く。それがフウルフェには、この男の命は私の命令でどうにでもなる、と伝えているようにしか思えない。

「安心しなさい、フウルフェ。彼にはとっておきの任務を与えた。そう、正に星を救う究極の作戦を実行する任務を、だ」

そして護民官はフウルフェに、これからゴルフエが行わなくてはならない屈辱と苦難の任務を教えた。フウルフェは、その衝撃をひとり受け止めていた。

ゴルフエがどういう気持ちでこの任務を受けたのか、あのカスケーを護ることに自身を賭け続けているゴルフエが、そして何よりも誇りを大切にするゴルフエが任務を達成した後、どうなるのか。

それはフウルフェにとっても耐え難い未来だった。あんなにも力

スケーを護る事に命を賭けて来たのに、その星を代表する者たちの捨て駒にされる彼。

救ってあげたい。大嘔吐きの烙印を押されたまま、魂を置き去りにしてしまう未来から、彼を。そしてもちろん、父親を。

フルフェの葛藤を、護民官はただじっと眺めているだけでよかった。ここは絶対に口を挟まないことが肝要だ。この賢く勘が鋭い娘に自分から気付かせ、言わせなくてはならない。

二人の愛する男を救う手立てが準備されていること。それをこちらから伝えてはならない。

この複雑な作戦は、あくまで自己犠牲の上に実施することで初めて成功する可能性があるのだ。

やがてフルフェが囁くように言う。

「護民官様。私は何をすればよろしいのでしょうか。」

それは娘が敗北を認めた徴だった。

フウルフェが旅立ったのはそれから二日後のこと。ちょうどゴルフエの戦隊がカスケーから出立する前日のことだった。

彼女は宙軍の快速二等戦闘艦に乗り、まっすぐ暗黒礁域へと向かった。そして安全航路のほぼ真ん中で、戦闘艦が積んで来た連絡艇を下ろし、そのただ一人の乗客となる。それは記憶装置が航路をなぞり、ほぼ全ての航行操作が自動操縦装置でまかなえる最新式の乗り物。その行く先は暗黒礁域アーケガル側出口付近にある前進砦の更に先、堂々と展開するカローン帝国皇太子直卒の大艦隊だった。

ほぼ一日の行程の先、彼女の船はカローンが制圧した二つの前進砦の間を縫って、記録された秘密の航路を辿ってアーケガルに迫った。そしてついに、アーケガルが青白いその姿を見せた時。

「そのフネ、停船せよ！」

彼女が気付かない間に二隻の船が両側から寄せて近付く。

「停船しなければ、撃沈する」

既に暗黒礁域の無線通信障害宙域を出たらしい。そのカスケー語は正しくカローン人の発音で話されている。フウルフェは無線装置を入れると、大きく息を吸い込んでから話し始める。

彼女演じる一世一代の芝居の幕が上がった。

「カスケー星域次席護民官、パ・ラ・シレットの長女、フウルフェにございます」

引き出された女はすくつと立ち上がると胸を張る。

「殿下をご案内するよう、父に命じられて参りました」

カローン帝国帝位継承第一位の皇太子にして帝国軍総司令官、アルフェル・コト・ソーフ。帝国次席の権力者にしては飾りのない軍

服を着た彼は、穏やかとも言える眼差しで娘を眺めていた。

つと顎をしゃくつて、傍らの若き副官に何やら耳打ちする。副官ははつと気を付けの姿勢をとると、足早に艦橋の奥へと消えた。

「さて、まだ私はあなたを信用してはいない。そもそも、あなたが名乗ったものに相応しいお方かどうか、私には確信もない。恐縮だが主席護民官殿は何度か拝謁の機会があり、ご子息やご令嬢とも親しく談笑する機会もあった。だが、次席護民官殿となると……」

皇太子は意味ありげに顎を摘み、玉座に等しい司令官席から身を乗り出し娘を見る。

「あなたの父上、かも知れぬシレット氏は主席護民官のバ・ラ・クグレック氏と折り合いが悪く、今時大戦では我々と戦うことなく和平の交渉をすべしと主張し、実際我々と交渉しようと動いたがため、敗北主義者の危険分子として捕縛・投獄されたと聞くが、確かな？」

フルフェと名乗った娘は眉ひとつ動かさず、堂々と反論する。

「殿下がお聞き及びになった父の行状は確かです。しかし、どうも情報が不正確のようですね」

「ほう。そなたは我らの諜報網が正しくないと申されるのか」

「そうは言っておりません。ただ、殿下の情報網には何がしらの誇張と想像が混じっている、護民官派の操作の色が覗える。そう申しただででございます」

「では、どういうことなのかな？」

「父は……カスケーの存続を願い、最善の方法を考え、行動したまでにございます。それが主戦論者たちに敗北主義と指摘され、それはもう星を挙げて戦争へ邁進する最中でありましたから逮捕という異常事態となり、反対論が想像以上に大きかったため、彼らは慌てて肅清を繰り広げたのです。結果、わがカスケーは凝り固まった主戦論者が独裁を執る、いびつで危険な存在となってしまうました。このままでは星が滅びる、父はそう考えてかねてより用意させた脱出路を使って私を逃がし、全てを託したのです。カスケーを、そこ

に住む人々を助け、この先、存続の道を鎖さぬために」

皇太子は珍しい動物を見るような好奇心に満ちた表情で、

「我らカローンの星の下に屈し、その威光の下で命を永らえると？」

フウルフェは無念の表情を浮べると同時に、それを押し殺して微笑んだが、その苦しいありさまはすっかり皇太子の目に映っていた。

「はい。それが我らにとり屈辱であることは、聡明な殿下に隠しおおせるとは思いません。しかし、一時の恥辱に我を忘れ、命を託された自国民を殲滅戦の只中へ追いやることは何としても避けなくてはならないのです。それが今の執行部、あのプライドだけは高い護民官殿には出来るとは思えない。このままではカスケーは滅んでしまいます。どうか、カスケーをお救いください。そのためには速やかに閣下の艦隊を無傷でカスケー宙域にお送りしなくてはならないのです」

皇太子はしばし娘の顔を眺め、やがて、

「なにか、持参したのだらう。それをこれに」

この問い掛けには、いつの間にか戻った若い副官が前に出て、奥から持って来たフウルフェを捕縛した時に荷物の中から探し出したいくつかの書面と、彼女が持っていた安全航路の数値が入った自動操縦装置の記憶素子を皇太子に差し出した。

皇太子はそれを次々に捲っては目を通した。時折副官に耳打ちしてそれに副官が答える。この緊張の時、フウルフェは先ほどと同じ立ち姿を崩さず、直立不動で皇太子から目を離さなかった。やがて「そなたの論旨は、わかった。これは我が間諜が得た情報とも一致する」

皇太子は笑みをたたえ、

「ようこそわがカローンの光輝の下へ」

「ありがとうございます」

フウルフェの表情は歓喜に溢れ、それは見る者を惹きつけて見惚れさせた。それまで疑いの目で眺めていた厳つい軍人や、作戦ばかり

りを考えている頭でつかちの参謀たちまで口元を緩めその顔を見つめていた。

「ほんとうに、ありがとうございます。これでカスケーは救われま
す」

フウルフエは皇太子の前に膝を折る。

「カローンの庇護の下、カスケーが平安に過し、カローンとカスケーが互いに助け合う未来が実現します」

「どうか、畏まらず」

皇太子はフウルフエの手を取って立たせる。

「そなたの勇気が歴史を動かすのだ。よくぞ来てくれた。だがその前に、仕事は片付けなくてはならぬ。まずは我らがカスケーに行かねばならない」

「はい」

「航路図は使わせてもらおう。そなたは一人で来たのだな？」

「さようです」

「では帰日も容易いであろう」

皇太子は微笑むと、

「案内してもらおう」

カローンの誇る皇太子貴下の艦隊。大型艦で構成された本隊を軽快で強力な武装の護衛艦が囲み寄り固まって、ゆつくりと危険な礁域を進んで行く。普段の規律と訓練が一見危険な密集体型を見事に維持していた。

それを見るものがいとしたら、その壮大な光景に息を呑んだことだろう。

フウルフェが案内を始めて丸一日。

危険な宙域は彼女の案内で回避しつつ休むことなく艦隊は進み、遂に黒い霞の向こうに紅く輝く星が覗くようになった。

「あれがそなたの星だな」

皇太子が静かに尋ねると、

「そうです。母なるカスケーです」

「美しい星だ」

「ありがとうございます」

それは皇太子にとって正に勝利の瞬間だった。

そして、フウルフェにとっても苦い勝利は目前に迫っていた。

突然、艦内に警報が響く。

「接近警報！前方に磁気の異常あり！距離不明」

「艦隊！取り舵一杯！先導より順次回頭！艦隊即時逆順番で全力発揮」

皇太子は空かさず命じるが、頭の中では既に間に合わない、と断じていた。

「取り舵更に十五度！」

「機関！最大後進直ちに！」

「全員衝撃に備えろ！」

有能な部下が矢継ぎ早にそれぞれの部署に命じるが、そのどれもが無駄に終わるだろう。船体が無理な機動でガタガタと振動し、立っていた者は何かに掴まるのが精一杯。磁力のみで簡易固定していた物品が吹き飛び、宙を跳ね回った。

「ああ！暗黒陥穽だ！」

航宙参謀の恐怖の滲んだ声に誰もが息を飲む。それぞれの前方モニターに映し出されたのは真っ暗な闇だったが、その中に更に濃いしみのようなものがある。それは、必死に回頭しようとする艦をあざ笑うかの如く、次第に近付くにつれて、渦を巻くようにみえた。

それを間近で見たもので生き残ったものはいない、と言う。皇太子は指揮官席で身動きひとつせぬまま、宙の闇から視線を移し、固定する。

「そなた。怖くはないのか」

その、鬼の表情を浮べたままアルフェル皇太子がフウルフェを見る。据える。

「敵中たったひとりで死んでゆくのだぞ」

するとフウルフェは微笑んで、高らかに言い放った。

「全て覚悟の上でございます。それに私はひとりではありません。私にはカスケーの人々が付いています。私は役目を果たし、この上もなく幸福です」

その落ち着き払った声は、軍人の矜持で死の恐怖を抑えていたそこに集うカローン人たちの心を折るのに力を発揮する。ひとりの参謀がよるめいて倒れ、ひとりがすすり泣き始める。それはそこにいた人々に伝染し、動揺のざわめきが広がってゆく。

このような醜態をみせることを常日頃嫌っていたアルフェル皇太子が一喝しなかったことで、彼の心情がフウルフェにも分かった。彼は静かに座ったまま穏やかな眼差しをフウルフェに向けている。それはフウルフェの勝利の瞬間だった。しかし。

「わたしが死んでも、カローンは必ずそなたの星を滅ぼすぞ。そな

たの命と引き換えの行為は、わずかな時間をカスケーに与えるに過ぎない」

「その少しの時間がどれだけカスケーを救うことになるのか、殿下もお分かりでしょうに」

フウルフェは緩みかけた気を引き締める。まだ戦いは終わっていないのだ。

「父は必ず全軍をもってカスケーを獲りに来る。そなたはカローンの怒りを燃え立たせる愚かな行為をしたに過ぎないと後の歴史家は断ずるだろう」

「カローンではそうでしょう。しかし、カスケーは必ず救われます。殿下はこの戦いに備え充分なときを使い策を練ったことでしょう。

怒りに任せて攻め切れるほどカスケーは容易いなどと殿下はお考えでないはず」

「元より承知。だが、受けた屈辱は屈辱を与えることでしか拭えぬものだ。カローン帝国は必ずやカスケーを滅ぼすことであろう」

フウルフェも負けてはいない。

「そして殿下。あなたはそれを見ることがない」

フウルフェの声は静かで冷たかった。アルフェルは思わず立ち上がり、表情を消すと、腰に帯びていた剣を抜く。それは皇太子としての徴に過ぎないものだったが、彼は剣を抜き放ち、座を蹴るとひと飛びでフウルフェの前に降り立つ。その時、船体が鋭い軋みの音を立て、ぐらりと揺れた。人々は手近な固定物に掴まり、数人が間に合わず吹き飛ばされ叩きつけられたが、皇太子はフウルフェの前、剣を彼女にかざしたまま身動き一つしなかった。

「どうやらこの船も陥穽に落ち始めたようだな。せめてもの情けだ、全てが闇に閉ざされる前、その命、貰い受けようか？」

皇太子の声は冷たく、抑揚がなかった。フウルフェはじつと皇太子の目を見つめて、

「殿下が私を手には掛けることで最期のときの無念を少しでも和らげようというのでしたら、どうぞ成敗なさいなさい」

まるで他人のように言い放つ。

「そしてわたくしの血で穢れた身をわれらが星の護手である暗黒礁に捧げるがよい！」

つよい眼差しと燃え立つような怒りが交錯し、もはやふたりだけが対峙する破滅寸前の艦橋で最後の誇りを賭けた無言のせめぎ合いが続いた。

二人を見守るのは皇太子と共に戦った歴戦の勇士であるはずの者たち。もう望みのないことに絶望しうなだれる者や、最期はひとり静かに過ごそうと喧騒の場を離れる者、最後まで忠誠を崩さず、いざとなれば助太刀しようと皇太子の三步後ろで身構える親衛兵。

すると、フウルフェが嗚咽を漏らした。皇太子に翳された剣の前、震える喉と揺れる肩、流れる髪。頬に流れる涙は光る粒となって滴り落ちた。

「ようやく、本来の娘に戻ったようだな」

皇太子が苦笑すると、フウルフェは被りを振り、

「哀れなのです。私如きに命を奪われるあなた様が。そしてこのような不毛に駆り出され無益に命を落すカローンの人々が」

皇太子の顔が見る見る憤怒に変わってゆく。剣がぐいつと引かれ、それはそのまま前に突き出され、娘の胸を貫くか、と思えたが……

フウルフェは皇太子の様子に気も留めず、すすり泣いている。皇太子の剣は素早く突き出されたが、その切っ先はフウルフェの肩をかすめただけで引かれる。

「哀れとな。それはそのままそなたの星にも当て嵌まるであろうに」

皇太子は頓着なく剣を投げ出す。それはカタンと床に落ちるとふんわり浮かび、親衛兵がひとり、柄を掴んで引寄せた。

「そなたをそこまで強くしたものは一体何か？カスケーへの忠誠か？それともそなたの家族か？」

皇太子は普段の物静かで穏やかな話し方に戻っていた。

「自ら刺し違えてまで、護ろうとしたものとは、なんだ？」

フルフェは一問置くと、これも静かに答えた。

「信頼と、愛でございます」

皇太子は不意を突かれたようにフルフェを見る。

「私に喜びと安らぎと愛を与えてくださった方への恩返し、とでも言ったらよろしいのでしょうか」

フルフェの顔がほっとしたように緩んだ。その顔は、状況が状況でなければその場にいる者全てが見惚れるほど美しい表情だった。「そなたが、羨ましいな。そこまで尽くされた男はなんというしあわせな男だろう」

皇太子は苦笑する。

「わたしは、カスケーの謀略に敗れたのではないな。そなたの愛に敗れたのだ」

グラリ、と再び船体が傾き、隔壁にひびが入る。突然、内部気圧が崩れて、気体が一気に動く。人々はなぎ倒され、引き摺られ、隔壁のひびへ吸い寄せられて身動きが取れなくなる。

気圧の変動は急激で、それはものすごい圧力となって人々を襲う。あちらこちらと人が潰れ、断末魔の音が響く。正に地獄の光景で、死に行く者たちに階級の差、身分の差などはなかった。

四肢を砕かれた皇太子は息も絶え絶えに、それでも笑みをたたえたまま呟く。

「百戦錬磨の私が……まさか……たったひとりの愛に倒されるとは……」

皇太子の身体は見る間にバラバラとなり紅い霧となって四散した。

もはや艦橋の残骸に息のあるものはフルフェしか残っていない。血だらけで既に全身の骨が折れたこの状態で、まだ生きているということがすでに奇跡だったが、その奇跡もわずかな間だった。

彼女も例外なく、更に哀れな姿となって行き、命も尽きようとしていた。

今際の際、彼女は裂けた隔壁の隙間から宙に浮かぶ紅い星をみた。
そしてそこに浮かび上がる愛しい男の姿を認めたのだった。

「ああゴルフエさま……」

ゴルフエがカローンの皇太子が本当に死んでいた、と聞かされ、呆然と佇んでいた時、音もなくドアが開いて軍の制服と政府高官の制服二人の人物が入って来る。

二人ともよく知った人物だったが相對したことはなく、また、こんな前線にはいない筈の人物だった。そしてその後ろから、これも忘れるはずのない小男が付いて来る。

「司令。これが？」

片割れの軍人がゴルフエを認めて司令に尋ねる。

「はい。敵ストラー支隊を追い払ったゴルフエ上級統率官です」

ゴルフエは混乱しながらも後ろの小男を無視して二人に対し最上級礼をする。二人も軽く答礼すると、その軍人は、

「ゴルフエ統率官。実に見事な手腕であつた。カスケーは君に最上級の敬意を表するぞ」

「……ありがとうございます」

「しかし、残念ながら、この功績を全星に知らしめる訳には行かない」

軍の高官は続けて、

「緒戦はきみたちの並外れたはたらきによって勝利した。しかし、まだ敵が滅んだ訳ではない。これから長い不毛な消耗戦が始まるかもしれないのだ」

「そこでだ」

もうひとりの政府高官があとを引き取って、

「緒戦の勝利に酔うほどカスケーは余裕があるわけではない。これで得られる時間を使って軍備増強を急ぎ、中立民族に外交攻勢をかけ、カスケーの安全を確保しなくてはならない。そのためには、カスケー人民が一致団結し、困難に立ち向かう必要がある。もちろん、

今もカスケー人は一心同体だが、更に上を目指す必要がある」

「つまりは」

と軍人が続けて、

「まずは軍と政府が完璧に任務をこなしていると人民に知らせなくてはならない。そのためには個人の功績は全て政府の指導と軍の作戦の賜物とする風潮が絶対に必要だ。申し訳ないが君らの功績もカスケー全体の功績にしくはないのだ。わかるかね？」

めまいのようなものがゴルフエを襲う。思わず、手で目を擦る。

「大丈夫かね？」

「ああ、いえ。大丈夫です」

軍の高官はまくし立てるように、

「これからが正念場だ。カローンは必ず逆襲を期してくるだろう。全軍と言う訳には行かないが、植民地からも軍勢が駆け付けるはずだ。それに備え、カスケーも総力戦を覚悟しなくてはならない。防備を固め外交で勝利するのももちろん、カスケー人民全員が不退転の気持ちで戦い抜くことが肝要だ。数日後に星域人民皆兵令が施行されるだろう。これでカスケー軍は一気に十倍に増える。貴官には後方にて新兵の教練をお願いすることとなる。忙しくなるぞ」

政府の高官も、

「これで政府も一枚岩だ。敗北主義に捕らわれ、戦わずしてカローンへ跪こう、などという輩は一掃した。我らはこれで総力を挙げてカローンと対することが出来る。これも貴官らの働きに負うところが大きい。改めて感謝するぞ」

ゴルフエの顔は蒼白に近かった。まるで高官たちの話は遥かに遠い世界の話だった。遠くて寒々としていた。

「カローンの皇太子。アルフェル殿下はどのようにして死んだのでしょうか？」

二人の高官はゴルフエの問いにあからさまな嫌悪を見せた。

「今は貴官が知る必要はないだろう」

政府の高官がそう言うと、軍の高官が続ける。

「現在言える事は、我が宙軍の計略により敵艦隊を壊滅させた、その中の一艦にアルフェルがいた、ということだ」

そこで基地司令の方を見て、

「司令官。この上級統率官はかなり疲れておる。十分な休息を与えて欲しい」

「了解致しました」

高官二人は頷くと先を争うように部屋を出て行く。ほんの少しでも長居をすれば、己の名誉を捨てて星を救った男に何かされるかもしれない。そう考えたのかも知れない。

そしてそれは概ね正しかった。

二人が去った後をじつと見つめていたゴルフエは、やがて司令に無言で敬礼するとドアに手を掛ける。

「いやあ、全く完勝だね。なんとも気分がいい。面白いように予測通りことが運んだね」

ゴルフエは小男の甲高い声に立ち止り振り返る。モリヨフカは得意満面だった。

「カローン軍の命運を左右する二人の男。有能且つ危険で勇氣に事欠かない。誰がどう見たって、そう、敵である我々がみても間違いない。真正正銘の英雄だ。でもね」

モリヨフカはクククと笑って、

「ああいう男たちはね、信義とか祖国愛とか正々堂々とか、そんな中身のない気分だね、必要以上に反応するものなんだよ。その二人がカスケー攻略軍の中心にいと聞いて、ぼくはかねてから考えていた作戦を実施することを提案したんだよ」

ゴルフエは次第に身体の中が冷えて行くような、それでいて何か燃えたぎる何かが込み上げてくるのを感じていた。そんなゴルフエにお構いなく、モリヨフカは持論をまくし立てる。

「片や、星を代表する者。片や、軍にこの人ありと謳われた者。危険なのは後者だ。この英雄にはこちらも英雄の資質を持った者を派

遣する。もちろん、小細工はあの將軍さんには通用しないだろう。

しかし、信義やら信条やらにしばられた男は、同じ資質を認めた男が繰り出す嘘を、認めたくなくとも認めなくてはなくなる。相手の断腸の思いを、星を護るために己の命よりも大切な誇りを捨てる行為を、受け止めてしまふのだ。よって、かの將軍は踵を返した」

モリヨフ力は破顔する。

「痛快じゃないか。分かっているも心情面で切り捨てることが出来なかったんだ。また戻ってくればよい、その余裕が鍵だったが、まんまとはまったね。今頃、本当に皇太子が死んでいたと聞いて、彼がどんな表情をしているか、考えるだけでも三日は楽しめるというものだ」

「皇太子は、何故死んだのですか？」

ゴルフェは静かに尋ねた。その声に何かを感じた司令官が一步、にじり寄ったが、モリヨフ力にはゴルフェの様子など目に入っていない。あの高官二人も話さなかった顛末を話し出す。

「どうやって？こちらは更に痛快だ。あの王子様は英雄であること、王者の、それも武断の帝王であることが大事だったんだ。実はこれがカローン最大の弱点と言ってもよかった。だからこちらには一見力が弱く消し飛ぶような者を派遣する。そしてその弱い者が最強者に対面しても物怖じせず、自分の星への献身を、本物の愛国心を語る。それがいま正に戦っている相手であってもあの王子様は感動してしまうのさ。もちろん、暗黒礁の恐ろしさは身に沁みている彼らのこと、そこを安全に通り返けられるという提案は蜜のように甘い。もとより自らあの難所を越えるつもりだったのだからね。あの王子様は相手を見分ける目のある立派な男だった。周りには優秀な部下が揃っていて、それも王子様の資質を示していた。だがね、英雄と言うものは自分の基準で物事を見つめるものだ。芯から信義を重んじるように見えた女が、自分を汚い毘にかけるとは思いもよらなかったことだろうよ」

「おんな？」

「そう、王子様を地獄へ道連れにしたのは勇気ある女性だ」

ゴルフエは凍り付く。心に浮かんだもしやと思ったことをすぐに打ち消すが……

「高級号令官殿。その女性の名を知っておりますか？」

「もちろん。私が自ら計画を伝授したのだから。誰もが尻込みする中、自ら志願した立派な方だ。この罫を完成するために父親にも汚名を着て貰った。売国奴の汚名をね。これがなければ彼女の演技も無駄に終わったことだろう。父親が星を裏切りカローンに擦り寄ろうとしたことは当然、皇太子の耳にも入っていたはずだ。そうなるように情報を漏らしていたのだからね。娘の死を知った次席護民官殿は獄中で自害されたと言う。全てが終われば特赦、そして名誉挽回の法廷が開かれるはずだったが、残念なことだ」

「フウルフェ……フウルフェなのですね？」

モリヨフカはしたり顔で大きく頷きながら、

「そう、勇気あるお方はパ・ラ・シレット・パレ・フウルフェ、シレット次席護民官殿の長女だ」

ゴルフエはふらりとモリヨフカに近付く。そして、目にも止まらぬ素早さで強烈なパンチを小男の顔に見舞った。

小男は正に宙を飛び、壁にぶち当たると反動で部屋を横切って吹っ飛び、二度三度と回転しながら宙を舞った。基地司令官がその身体を受け止めなければ、いつまでも舞っていたことだろう。

「な、な、な、なぜっ？」

口から血を滴らせ、モリヨフカはぜえぜえと息を吐く。

「どうしてなんだよ！」

しかし、その時にはとつくに、ゴルフエは部屋を後にして立ち去

っていた。

その日の夜。「カスケー軍、カローンの精鋭軍破る」の報がカスケー全星を駆け巡った。

暗黒礁域でカスケー攻略を任されたカローンの皇太子が行方不明。軍は詳細を発表しないが「某情報源」よりカスケーの精鋭特殊部隊がカローン軍を罠にかけた模様。先鋒を務めカスケーに接近していたストラー艦隊が引き返したとの情報もあり……

アルフェル皇太子の死を聞いたカローン王は激怒し、自ら全軍を率いて出撃すると息巻いた。しかし、宰相を始め閣僚たちでも国王に盲従していない者たちは冷静だった。

カスケー遠征軍はカローン全軍の三分の一を占めていた。そのほぼ半数が消えてしまったのだ。もちろん補充し増強すればカローンの力からしてカスケーは必ず屈するだろう。だが、カローンは巨大に過ぎた。遠方の植民地ではカローンの衰弱を待っている者たちがいる。支配の根幹である軍が引き抜かれその力が弱まれば反逆の気運が高まるだろう。

宰相は国王派の首魁である内大臣を呼び寄せ、密談する。有能だった皇太子の死によって地盤が揺るぎかねない彼ら国王派は、革新派の宰相が思案した提案に乗った。

深夜、王宮を訪問した内大臣ら国王派の重鎮たちは未だ怒りの冷めない国王を交えて協議する。深謀遠慮とは程遠い独裁者であるシユバック王を言い含めるのは困難だった。しかし、内大臣の夜を徹しての訴えは功を奏する。国王は夜の明ける頃には内大臣らにお墨付きを与え、離宮の奥へと消えていった。

シユバック王は決して愚か者ではなかった。絶大な権力を振るう国王として広大な帝国領域を治めるには己の威光ばかりに頼るわけにも行かない。宰相や内大臣ら官僚の助けを得られなければ自分の代

は保つとしても次の代——皇太子が戦死したので次男のランゲを立太子させなくてはならない——に保証がなくなる。また、閣僚を排して身内の登用ばかりでは王室が揺らぐことぐらいは分かっている。うるさく中央集権体制から地方自治統制への段階的移行を進言する革新派からもたらされた譲歩、王が停戦を承諾するのと引き換えに王室予算削減案を撤回する、という宰相の提案を上手く利用しましょう、と内大臣は言った。

「失礼ですがランゲ殿下はアルフェル殿下と比べ次期国王としての力量に不安があります。ここはひとつ時間を稼ぐためにも宰相一派に歩み寄る方が得策と思います」

内大臣はそう言って国王を見上げた。長年王を支え続けた内大臣の真剣な眼差しを見ながら王は怒りの矛を収めることにした。

戦死したアルフェル皇太子のため喪に服すると称し、停戦を承諾したのだった。

翌朝、カローン本星の帝国府から全帝国臣民に対し、カスケーとの一時的停戦が布告された。

同時にカスケーでもカローンと停戦することが発表される。平和にカスケーは沸き立ち、カローンの市民たちも怒りを装いながら内心ほっと胸を撫で下ろしていた。

互いがただでは済まない大戦に突入する危機は、こうして回避されたのだった。

数日後のこと。アルフェル皇太子の艦隊が全滅した場所へカスケーの偵察船が出向き、同じく偵察に出たカローンより先に重要なものを回収してきた。それは微弱な信号を発して漂っていたちいさな箱。皇太子の旗艦に備え付けられていた記録装置で、解析の結果、艦隊の最期の様子が分かった。艦橋の音声記録も見つかり、最期の記録は最高機密として厳重にしまいこまれた。

ゴルフエは策を弄してその記録にアクセスし、フウルフエの最期

を聞くことが出来た。そしてそれは軍人としてのゴルフに止めを刺すことになったのだ。

老人が口を閉じると、ながい沈黙が続いた。老人もノルケも思いは遠く暗黒礁域にあった。

それを破ったのは酔客のひとりが誤って落した杯の音で、床に響く甲高い金属音は夢想を覚ます合図になった。老人は眠そうな目を擦り、両手をテーブルに乗せる。

「ゴルフエは、あの暗礁でフウルフエがどう振るまったのか、それが分かると魂を喪ったようになってしまった。無気力になり、病氣休養を申し出、休職した。長い間、世間に背を向けていたのだ」

老人は空の杯にノルケが酒を注ぎ足しても何の反応も示さなかった。ただ機械的に杯の中身を飲んでいる。そんな老人を見ながらノルケが語った。

「あの時の報道を軍のライブラリーで読んだことがあります。皇太子の艦隊はわが軍の極秘部隊により壊滅させられたとありました。また、ストラーも罫に気付いてすごすごと引き返した、とも。ここにもゴルフエやフウルフエのことなど書いてありませんし、そういう謀略が仕掛けられたことも書かれていなかった。政府と軍を賞賛する記事で溢れていましたね」

老人はただ杯を口に運ぶだけ。ノルケは続ける。

「しかし、カローン側にも真実に感付いていた者がいたはずだ。特にストラーは皇太子の死とそれを報告に来たゴルフエのことを調べればこの秘密を暴露しようと思えば出来たわけだ。カスケーが汚い手を使ったと。ストラーは何故黙っていたんでしょうか？」

老人はふん、と鼻で笑う。

「ストラーは立派な男だと思うよ。話せばそれを仕掛けたゴルフエたちに難がある。例え名前を伏せられ、命令に従っただけとの同情があってもな。それに、謀略に気付きながら引き返したのか、との非難も当然ストラーに降り掛かる。世間にあの緊迫した状況や兵士

の心理など理解出来るはずもないからな。結局亡くなるまで黙っているしかなかったのさ。まあ、これもあのモリヨフ力が考えていた筋書きのひとつだったんだろう」

なんとも後味の悪い無言の時間が流れる。老人は杯を重ね、私服の青年将校は黙ってその杯に酒を注ぐ。やがて問わず語りに老人は話を再開した。

「ゴルフエが軍を退いたのはその二年の後だ。随分と長く掛かったものだ。ほんとうはすぐにでも辞めたかったのだが、有能だった士官がすぐに辞めるのは中々に難しい。記録の上だけの存在とは言え、あれこれと二年の月日が経っていたのだな」

老人はじつと壁を見つめている。ノルケも動かぬまま老人の顔をみつめていた。

「そのくらの時間ではゴルフエの痛みは癒えなかったが、それでも怒りと無念に苛まれることはなくなっていた。虚しさだけが満ちておった」

老人は自ら樽を取り、のこった酒を最後の滴まで自分の杯に注ぐ。「それから先は話すほどのものではない。ゴルフエは退官の際、星から与えられたかなりの金で船を買い、それを気ままに動かして彷徨い、漂い、長い、長いときを経て……」

語尾が掠れて黙り込んだので、ノルケは老人が寝てしまったのかと思った。だが、再び老人は顔を上げ、杯をあおってから、

「たまにはフウルフェ礁にも行った。そこに行くまで何十年も待たねばならなかったが。いや、なに、星はゴルフエがどこに行こうと一切邪魔などしない。彼が真実をベラベラとしゃべり続けるのなら口封じに何かしたかも知れんが……いや、何もしないな。何を言ったところでなにひとつ変わりはしない。彼がフウルフェ礁に行かなかったのは個人的な理由だ。惨めに生き残った彼は死んだ彼女に合わす顔がない、と考えてふん切りが付かなかったのだよ」

「それで、ゴルフエはフウルフェ礁で何を見たのです？」

静かな問いに老人は寂しそうな笑いを漏らすと、欠伸をする。

「何か見たか、と？何も見やしないさ。現実残酷なものだ。そこにあつたのは多くの岩クズと難破船の欠片、それだけだ。青い炎などどこにも見えない。だが」

老人はカツンと杯を置くと、こう言った。

「それでもフウルフェはほんとうにあの星を巡る欠片になっているのだ」

再び沈黙が二人を包む。ノルケはなんともやるせない気持ちで老人を見ていた。

自分が命を賭けて護ると誓った星に隠されていた欺瞞。それは将来を囑望される士官にとって衝撃以上の何ものでもなかった。

この話を老人の法螺話として片付けてしまうことは出来る。現に上官たちはこのノイ・レ・パウスのことを嘔吐きと断じて黙殺する。きつと彼らも表の伝説だけでなく、この裏話を聞いているはずだ。

軍と政体にとってこの話は悪意の塊だった。だからこそゴルフェとフウルフェの話はタブーとされているのだ。

だがしかし、この話が嘘というのであれば、なぜそう否定して老人を捕まえないのだろうか？そうしないのは……話に真実が含まれているからに相違ない。

真実は弾圧すればするほどいつか明るみになる。それは隠蔽が必ず暴露の危険を伴うからで、隠せば隠すほど真実は輝き生き延びるからだ。

そう、だからこそ軍も政体も老人とその話を野放しにして、法螺吹きと一笑にふすのだ。そうしておいて、やがて話に尾ひれが付き、真実とはかけ離れたほんものの法螺に近づくように放って置くのだ。誰もが自分の仕える星の悪口など好まない。話は都合の良い所ばかりが残り、それは本当にあつた話ではなく美しいおとぎ話に、伝説になる。そう、だからこそフウルフェの名前は残されたのだ。真実として輝くのではなく、伝説として名前だけが残るように。

それでもわたしは、幻滅してはいけない。わたしはあの星の士官

であり護り手のひとりなのだから……

ノルケは深酒のせいばかりでなく、何かの病気にかかったかのように気分が悪くなっていた。それをなんとか押し殺すと、口を開いた。

「しかしパウスさん。あなたは二人の話を、なぜ見てきたように……」

なぜ見てきたように話せるのか。なぜ、真実をばかしておとぎ話のように話すのか。

ノルケはそう尋ねたかった。が、果たせなかった。

老人は既に眠りの底に沈んでいて、軽くいびきをかいている。軽く溜息を吐いたノルケが、老人の肩に自分の上着を掛けた。そこであるものに目が留まり、動きを止める。

すやすやと眠る老人の皺だらけの顔は穏やかそのものだった。

半分酒の残った杯に掛かった左手。その第三指が外れかかっている。よく出来た古い義指だった。我に返ったノルケは、そつと老人の左手を掴んで指を元通り嵌め直した。そこで老人の掌に何か文字が彫られていることに気付く。

もちろん、そうだろうとも。もしやと思い、それを確かめに接近したのだ。予感当たった。

だが、それが現実だったと知つたいま、この底知れぬ虚脱感をどうしたらいいのだろう。

結局のところ、老人は未だにカスケーに忠実なのだろう。真実を話しても虚しいだけでなく、カローン側を利用するだけと心得ているのだ。それでもこの老人、真実をばかし美しく飾った昔話をしないではいらなかった。長いながい時、老人にとっては贖罪の旅の間、機会あるごとに……

ノルケはその心情を思い浮かべた傍から振り払おうと、杯に残った甘ったるい酒を飲み干す。

そして思った――我らの星カスケーが、どんな計略で今日に至ろうと、どんなにそれを恥じて隠そうと、この老人やフウルフェが英雄であったことを消し去ることは出来ない。それに、我々は葬り去られた彼と彼女に大いなる借りがあるはずだ。

ノルケはさつと立ち上がるや、最高司令官に対してのみ行つ、カスケー式最上級礼をきちりと決める。

敬礼を受けた人物は正体なく眠っていた。

その掌にはカスケー語で「フウルフェよ 永遠に光あれ」と刻まれている。

25（後書き）

ソーラーセイル 太陽帆について

拙作ではあたかも恒星風を受けて宇宙船が進むような印象で書きました。実際の原理もそうであると誤解されそうなので、あとかきの代わりに少々太陽帆について書かせて頂きます。

太陽（恒星）からの太陽（恒星）風によって推進するのであれば夢があつていいのですが、実際は光子がセイルに反射するときに発生する反作用を利用する推進方法です。

1919年ロシアの科学者フリードリッヒ・ツァンダーやコンスタンチン・ツイオルコフスキーらが研究成果を発表、24年にツァンダーが理論を確立しましたが、実際に宇宙という過酷な環境に適応する帆の素材が難しく、初めてソーラーセイルで光子加速に成功したのは日本のJAXAのIKAROSで2010年のことでした。SF作品ではアーサー・C・クラークの「太陽からの風」やコドウェイナー・スミスのThe Lady Who Sailed The Soul が有名です。

出版問題で話題を呼んだ堀晃の「太陽風交点」での太陽風ヨットも印象に残りますね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7622v/>

シェルボックス・ストーリー

2011年9月14日03時27分発行